山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第38集

稲荷塚古墳

INARIDUKA KOFUN

1988. 3

山梨県教育委員会

稲荷塚古墳

INARIDUKA KOFUN

1988. 3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、1987年度に実施した甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園地内の山梨県東八代郡中道町下向山字東山1415番地に所在する稲荷塚古墳について、発掘調査の結果をまとめたものであります。

稲荷塚古墳は、曽根丘陵のひとつである東山の最高所、標高340.2ｍの三角点から僅かに北側に下がった緩斜面に立地し、調査対象面積はおよそ200㎡であります。調査の結果、当初対象としていた古墳の他に、ほとんど消滅した１基の古墳が新たに発見され、これを２号墳といたしました。

稲荷塚１号墳は、直径約20ｍの円墳で、墳丘上部を削平されて天井石も消失していました。南西に開口する横穴式石室は、東側側壁が内側に倒壊していましたが、閉塞石・西側壁・奥壁の一部は良好に残っておりました。また、倒壊した側壁によって、石室内部の副葬品があまり破壊されていなかったことは幸いでした。石室内の敷石上及び石室入り口部からは、土師器・須恵器・直刀・甲冑小札類・鉄鏃・馬具・玉類・銅鋺などが出土しておりますが、直刀のうち銀象嵌装飾円頭大刀と銅鋺の発見は注目すべきものであります。これらの遺物によって、調査者は本古墳の築造年代を６世紀後葉とし、７世紀代まで追葬が行われたことを想定しております。

本古墳の所在する中道町は、先土器時代に始まり各時代の遺跡が豊富なことで知られていますが、特に本県古墳文化の発祥の地として有名であり、東山の北側山裾に当時では東日本最大の前方後円墳である銚子塚古墳、本県最大の円墳丸山塚古墳が存在するのを初め、付近一帯には前期古墳が集中しております。後期古墳の時代になると、その中心地は他地域へ移りますが、昨年度の考古博物館構内古墳及び今回の稲荷塚１号墳の調査によって、この地に依然として有力豪族がその地位を保持していたことが確認されました。

特に象嵌装飾円頭大刀は本県初見のものであり、東山梨郡春日居町寺の前３号墳出土の単鳳環頭大刀把頭の存在などと関係付けて、甲斐国古代勢力の政治的動向を想定し得る可能性をもつ貴重な資料であります。また、銅鋺は仏教関係遺物として、この時期に東国を中心として分布するもので、県内では春日居町寺の前古墳・狐塚古墳から各１個ずつが出土しております。東八代郡下で発見されたのは、本古墳が初めてで、この地の伝統的勢力が連綿として存続・推移し、仏教文化の摂取にも努めていた状況を示しております。本報告書が、古墳研究の資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、お世話になった方々や直接発掘調査に当たられた方々に、改めて深甚の謝意を表します。

１９８８年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　磯　貝　正　義

例　　言

1．本報告書は、山梨県東八代郡中道町下向山字東山1415番地所在の稲荷塚古墳１号墳・２号墳の発掘調査報告書である。

2．本報告書は末木　健が編集し、第Ⅰ章～第Ⅳ章までを末木が執筆、附編は財団法人山梨文化財研究所鈴木　稔、河西　学氏による。

3．本報告書の写真は、末木　健が撮影したが、象嵌装飾円頭大刀に関する写真は鈴木氏による。

4．本古墳の発掘調査・整理参加者は次のとおりである。
石原はつ子、出月遊亀子、矢崎ます子、矢崎悦子、矢崎よ志子、梅林はなの、長田久美子、田中正江、矢崎喜美江、弦間千鶴、若尾澄子、石川操、遠藤映子、清水江利子、河西拓也、後藤良美、松野和美、和田宏美、内藤真千子

5．本古墳出土品及び調査図面・写真は山梨県埋蔵文化財センターで保管している。

6．象嵌装飾円頭大刀及び・銅鋺・馬具・甲冑・武具の主要なものは、財団法人山梨文化財研究所で保存処理を行った。また、大刀・銅鋺等の蛍光Ｘ線分析は東京国立文化財研究所の協力を得た。

7．本文挿図中の遺物番号と出土位置番号の関係は、巻末に対照表を載せてあるので参照してほしい。

凡　　例

1．土器断面の白抜きは土師器、黒塗りは須恵器である。

2．土師器に掛けてある粗の網スクリーントーンは赤色塗彩、密の網スクリーントーンは黒色研磨を表現している。

目　　次

序
例言
目次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 1
　第1節　地理的環境 …… 1
　第2節　歴史的環境 …… 2

第Ⅱ章　発掘調査経過 …… 3
　第1節　調 査 日 程 …… 3
　第2節　調 査 組 織 …… 3
　第3節　調 査 方 法 …… 3

第Ⅲ章　遺跡の概要 …… 4
　第1節　1　号　墳 …… 4
　　1　墳丘・石室 …… 4
　　2　出 土 遺 物 …… 8
　第2節　2　号　墳 …… 26
　第3節　3　号　墳 …… 26

第Ⅳ章　考　　察 …… 26
　第1節　遺物の年代 …… 26
　第2節　歴史的位置 …… 27

ま　と　め …… 28

附　　編 …… 29
1．稲荷塚古墳石室を構成する岩石について …… 29
2．稲荷塚古墳出土直刀および銅鋺の保存処理 …… 30

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡位置図 …… 1
第 2 図　墳丘地形図 …… 4
第 3 図　墳丘・列石・石室全体図 …… 5
第 4 図　石室展開図 …… 6
第 5 図　石室平面図 …… 7
第 6 図　遺物出土位置図 …… 8
第 7 図　出土遺物（土師器・須恵器１） …… 10
第 8 図　出土遺物（須恵器２） …… 11
第 9 図　出土遺物（須恵器） …… 12
第 10 図　出土遺物（須恵器４） …… 13
第 11 図　出土遺物（須恵器５） …… 14
第 12 図　出土遺物（直刀・円頭把頭鍔） …… 15
第 13 図　出土遺物（刀子・雲珠） …… 18
第 14 図　出土遺物（鐙） …… 19
第 15 図　出土遺物（轡・鉸具・飾り金具） …… 20
第 16 図　出土遺物（鉄鏃） …… 21
第 17 図　出土遺物（小札１） …… 22
第 18 図　出土遺物（小札２） …… 23
第 19 図　出土遺物（銅鋺・玉・金環） …… 24
第 20 図　２号墳全体図 …… 25
第 21 図　甲斐国古墳の変遷 …… 28
第 22 図　象嵌X線写真描き起こし図 …… 33

図　版　目　次

図版 1 …… 航空写真
図版 2 …… 石室・墳丘・遺物出土状態
図版 3 …… 石室・墳丘・遺物出土状態
図版 4 …… １号墳出土須恵器・土師器１
図版 5 …… １号墳出土須恵器２
図版 6 …… １号墳出土象嵌飾円頭大刀・刀子・鉄鏃
図版 7 …… １号墳出土馬具
図版 8 …… １号墳出土甲冑小札・銅鋺・玉
図版 9 …… １・２・３号墳出土土師器他
図版 10 …… ２号墳墳丘出土弥生土器・縄文時代石器
図版 11 …… 象嵌保存処理関係写真

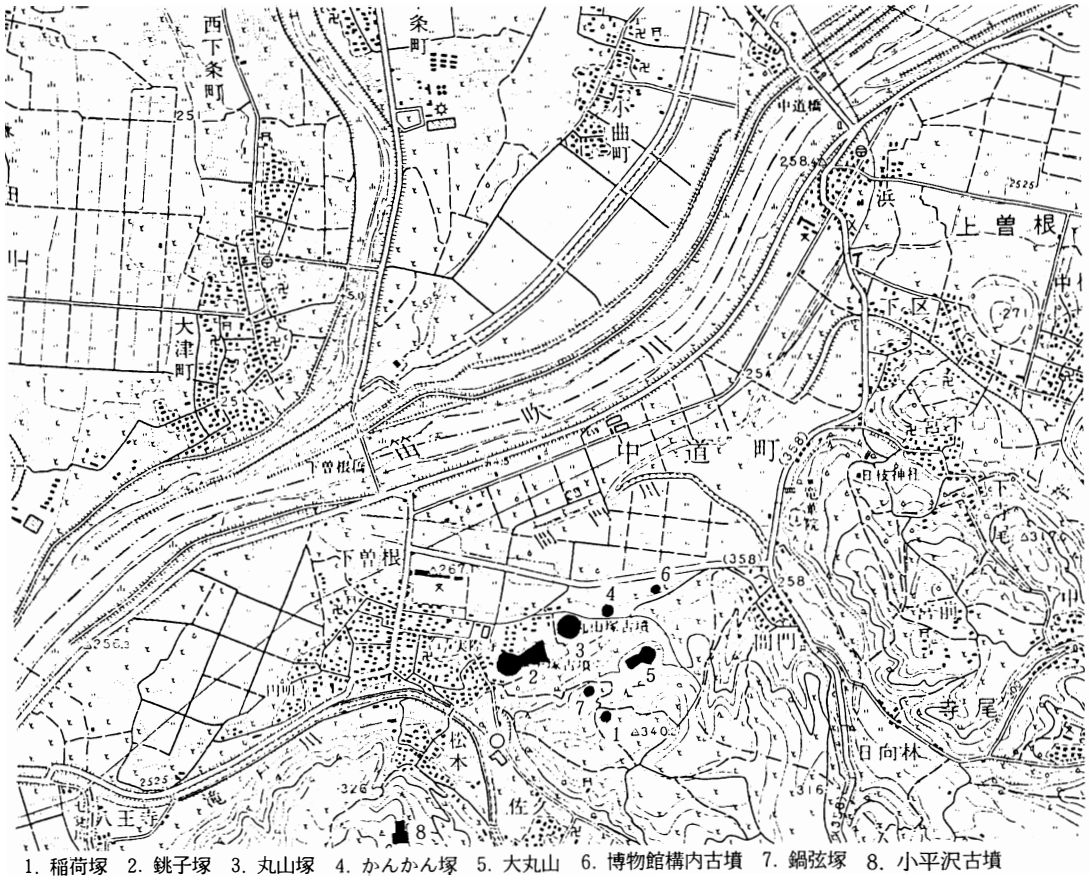
第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

稲荷塚古墳は中央線甲府駅より南へ直線で約8.5㎞の、東八代郡中道町下向山字東山1415番地にある。現在『山梨県甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園』として、県が整備を進めている公園用地内に在り、現況は山林である。

本遺跡の立地する曽根丘陵は、甲府盆地の南西縁にあり、標高350～400ｍ前後の平坦な丘陵が列をなしているところから、曽根丘陵列とも呼ばれる。丘陵の南から東にかけては御坂山脈が屏風のようにそびえており、北側には標高250～300ｍの甲府盆地が広がっている。丘陵の北側に沿って、富士川の支流の笛吹川が流れているが、現在は周辺の農地や宅地よりも河床が高く天井川となっている。古代には丘陵の末端から甲府盆地東部を勝手気ままに流れたものであろう。笛吹川と曽根丘陵に挟まれた平坦地は、現在水田や畠になっているが、地下水位が高く湿地帯のような状態であったと言う。

稲荷塚古墳は曽根丘陵の東山台地上の先端、標高330ｍに位置し、北側に急傾斜する変換点に



1. 稲荷塚　2. 銚子塚　3. 丸山塚　4. かんかん塚　5. 大丸山　6. 博物館構内古墳　7. 鍋弦塚　8. 小平沢古墳

第１図　遺跡位置図

ある。このため、南側から古墳の墳丘は大きく見えないが、北側からは5～6ｍの高さに見える。

第2節　歴史的環境

本地域は甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園として40haの地域が区域設定されているように、古代からの遺跡の宝庫であり、先土器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代の多くの遺跡が密集している。東山の平坦部は120基以上もの方形周溝墓が発見された上の平遺跡を始め、同じ場所の先土器時代～縄文時代中期の集落跡、弥生時代の東山北遺跡、立石遺跡、古墳時代中頃の東山南遺跡が隙間なく並んでいる。更に、古墳時代の墳墓では、東山の北に並んで造られている国指定史跡の銚子塚古墳附丸山塚古墳を始め、東山先端の中腹の丘の上に造られた、二重石室で有名な大丸山古墳、銚子塚の東にある5世紀後半の馬具が出土したカンカン塚古墳（茶塚）、横穴式石室をもつ博物館構内古墳など、本県の最も古い古墳が集中している地域である。それゆえ、巨大古墳が築造された4世紀には、畿内政権と強い結び付きをもった甲斐国内の最有力豪族が、近辺に居住していたと推定されている。

4世紀にその勢力を誇った当地域の有力豪族は、やがて八代町・御坂町や櫛形町地域に勢力を伸展させて行ったが、あるいはそれらの地域の豪族と連合政権をつくり、甲斐府盆地全体へと勢力を広めたものであろう。御坂町にある姥塚古墳や甲府市湯村の加牟那塚古墳などは、横穴式石室で長さ16ｍ～17ｍの規模をもち、6世紀後半以降の甲斐国造居住地と目されているし、同時期には県下各地に横穴式石室をもつ大小の古墳が築造されている。本地域でも古墳築造は継続されており、横穴式石室の古墳は点々と見られるが、正式な発掘調査が行われた事がなく、1986年度に山梨県埋蔵文化財センターが実施した考古博物館構内古墳が唯一である。なお、考古博物館構内古墳は調査者の坂本文化財主事によって、出土品から6世紀前半代に位置付けられている。この古墳からは、直刀、鉄鏃、甲冑、馬具、金環、玉、須恵器、土師器などが出土している。

奈良・平安時代のこの地域は、古文書等で明らかになっている事が少ないが、平安時代の地名をあげた『和名抄』を見ると、八代郡白井郷の一部に含まれると推定される。

第Ⅱ章　発掘調査経過

第1節　調査日程

1987.　7. 13　発掘調査開始。山林及び下草の刈り取り。

14　地域内の精査の結果、稲荷塚以外に2カ所のマウンドがあり、南側を2号墳、北側を3号墳と命名する。

17　除草終了。測量開始。

21　測量完了。発掘調査前の写真撮影。石室主軸に沿って南北と東西に十字にトレンチを設定。発掘調査開始。

25　石室側壁上部が検出される。東側側壁が大きく内湾している。

29　重機によって、石室内に落ち込んでいる側壁石を除去。

31　奥壁確認。鉄鏃、札などが出土。床面に近くなる。

8. 10　石室清掃。写真撮影。石室平面測量開始。

18　石室内に落ち込んでいる側壁石取り上げ。石の下付近より馬具、直刀、切り子玉、鉄鏃どが出土。

21　遺物分布図、遺物写真、遺物取り上げ。2号墳表土除去、3号墳表土除去。1号墳墳丘表土除去。石列が見つかる。

28　1号墳前庭部検出。

9.　3　2号墳測量開始。

14　作業終了。

22　埋め戻し。

第2節　調査組織

発掘調査担当者　末木　　健　　山梨県埋蔵文化財センター文化財主事

作業員　例言に記載

第3節　調査方法

調査地域は雑木林となっており、下草が繁茂していた。このため墳丘測量、発掘調査前の写真撮影が困難であったので、これを一部伐採・下刈りをした。墳丘測量は東山にある三角点340.2mを基準に、25cmの等高線を使った。1号墳は石室の位置、方向が不明確であったので、地表に露出している巨石を目安に、仮の中心線を設定し、中心線上とこれと直交するラインに墳丘の規模を知るためのトレンチを設定した。中心線・主軸は石室確認後に修正した。石室平面の実測は、中心線の西側3mに平行線を設定し、起点を奥壁と床面との接点に置いた。石室内の床面・側壁・奥壁の展開図は、等高線と中心線を使い、1m方眼にメッシュをひいて実測の基準とした。遺物分布図は同じ実測基準線を使用し、一部重なって出土する遺物は、部分的に図の外に記載した。

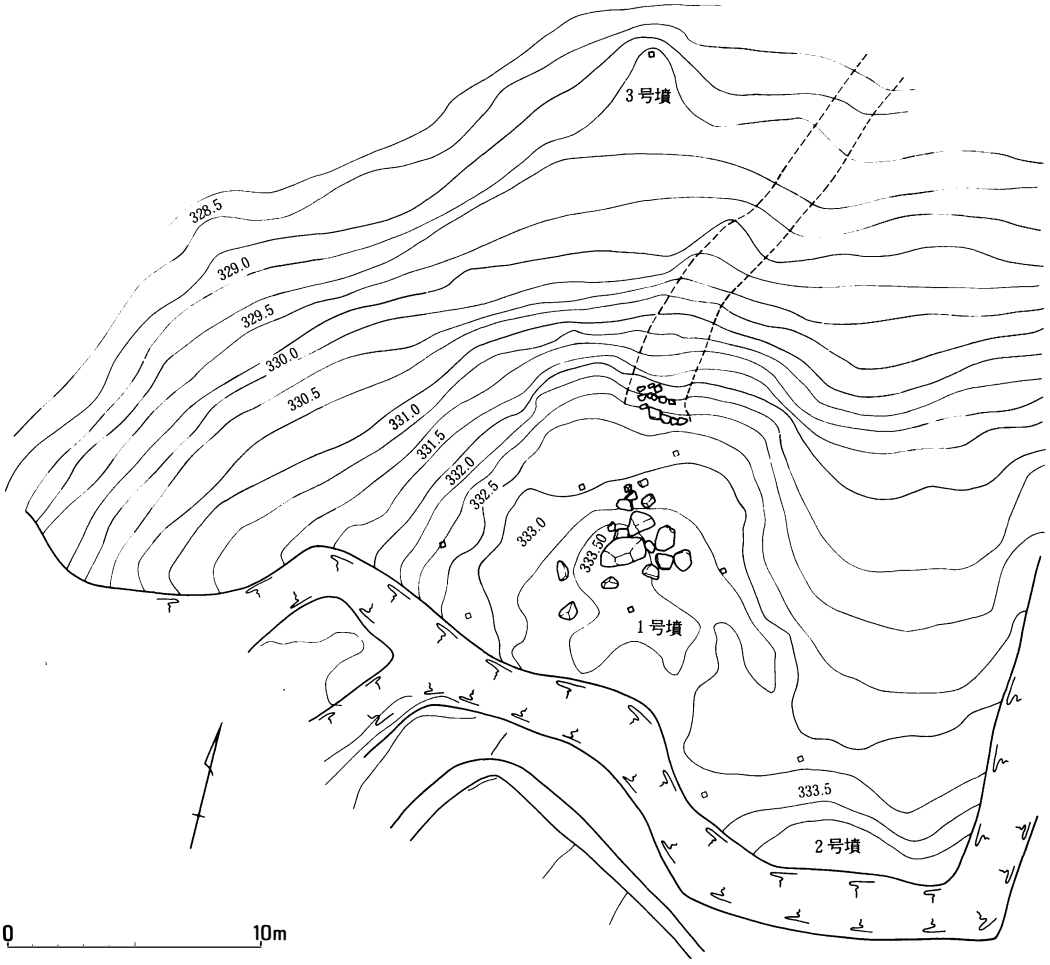
第Ⅲ章　遺跡の概要

第１節　１号墳

１．墳丘・石室

墳丘は旧来の状態で残っているのではなく、相当流出してしまい、丘陵頂部は地表と同レベル位まで高さは減じている。直径は約20m、墳丘の高さは、南側で１m弱、北側で３５mの高さが認められるが、墳丘表面観察では葺石、埴輪などの施設は認められない。墳丘の規模を知るために、東西南北方向にトレンチを設定し掘り下げたが、１トレンチは南側と北側に幅1.2mの溝が認められた。しかし、南や西側は溝がないため、これを墳丘に伴う周溝と考えるには、全体の調査が必要と思われる。

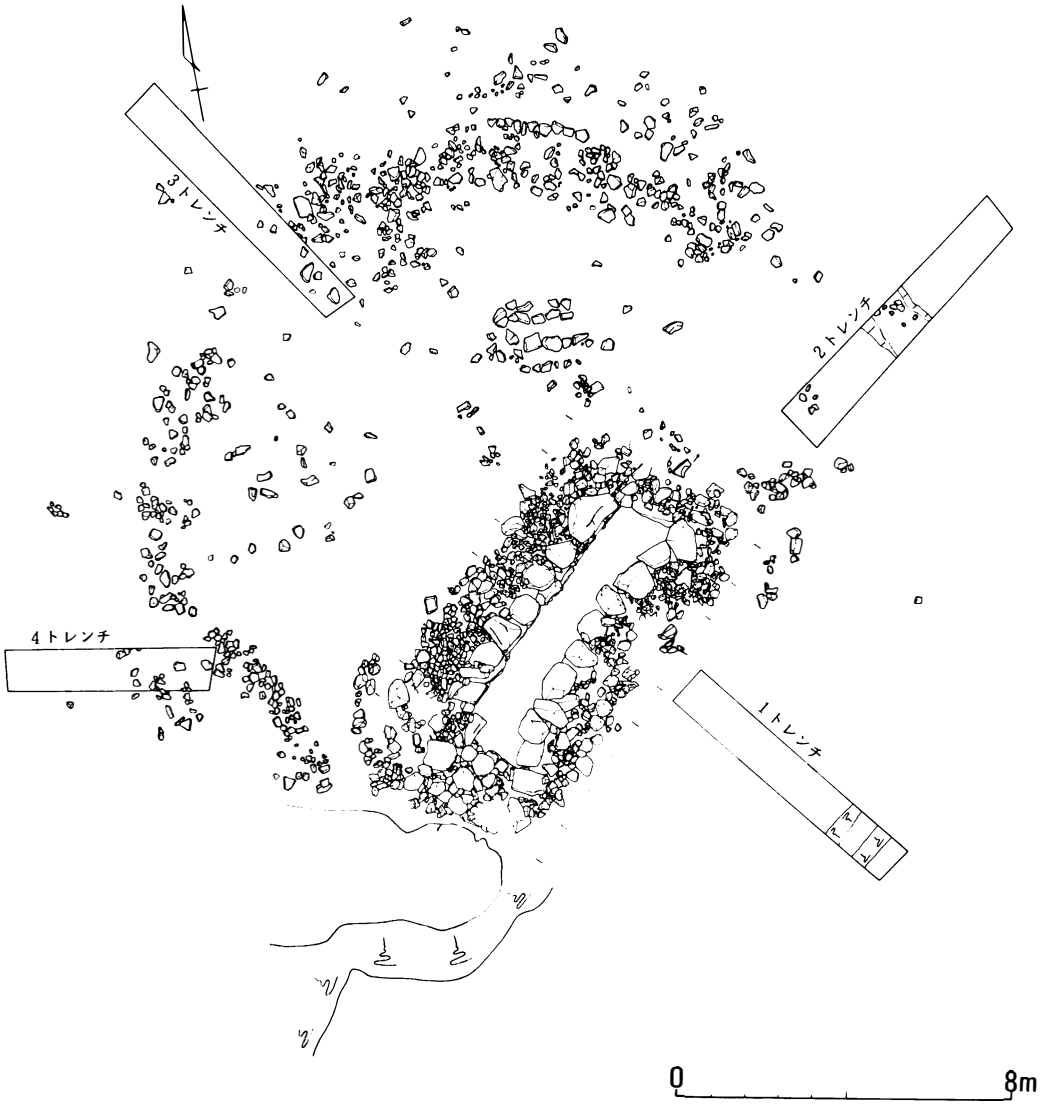
また、墳丘の裾には礫が雑然と巡っている。礫群の幅はおよそ２m前後であり、礫の大きさ



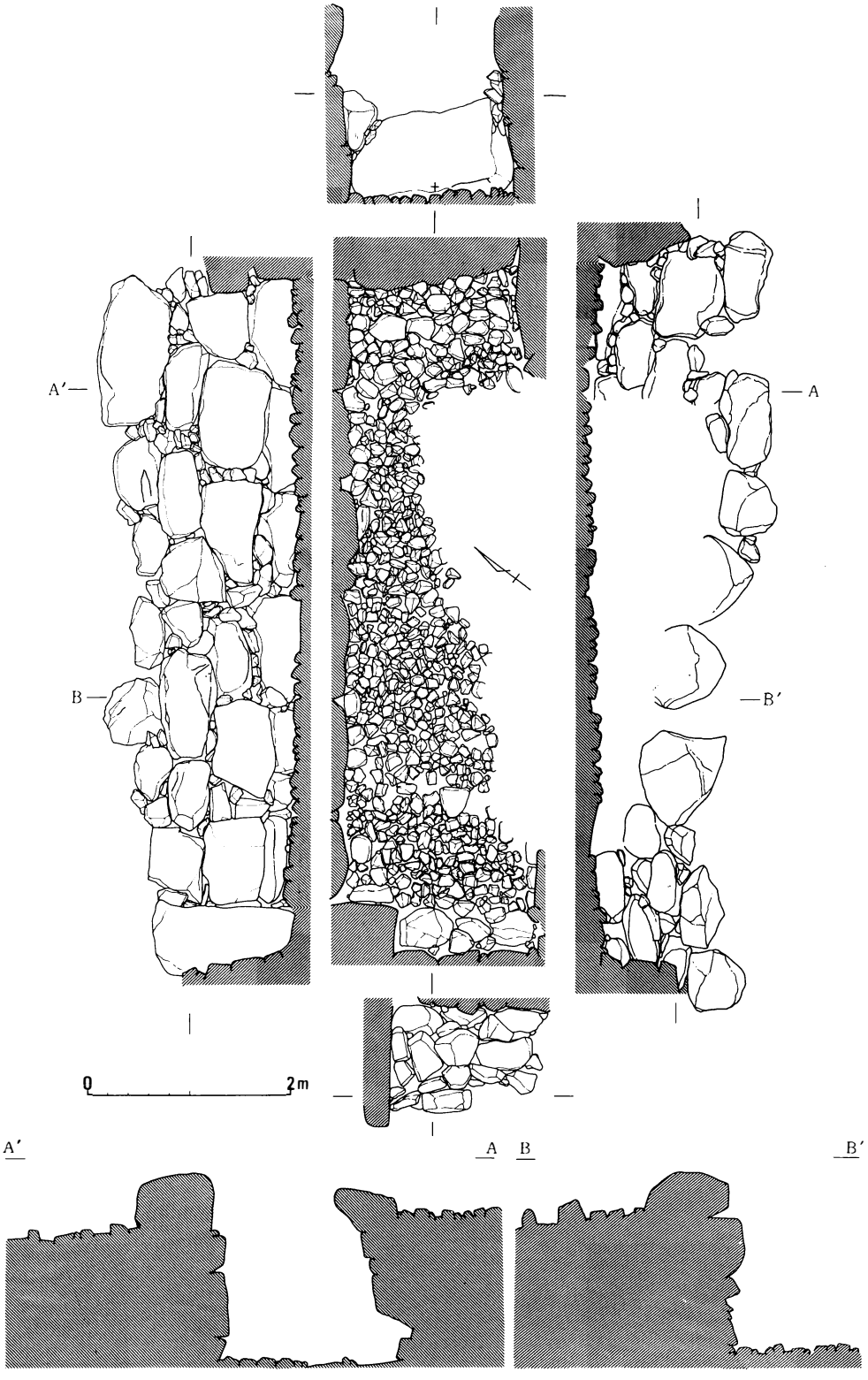
第２図　墳丘地形図

は拳大から人頭大位が多く、礫分布は北側に多く、南には少ない。これは、墳丘の盛り土の厚い方向に多く使用しているものと観察される。墳丘盛り土は極めて柔らかく締まりが無い。古墳の盛り土としては、例外的に柔らかい盛り土であり、表土を寄せて盛り上げたものと考えられる。

石室の主軸はN－50°－Eで全長8.2m、玄室長6m、羨道長2.2m、石室奥壁幅1.6m、玄室入り口幅1.85m、羨道幅1.4mである。石室の最大高は1.9m、奥壁高95cm、閉塞石高1mである。石室側壁の石積みは巨石の横口を使った横口互目積であり、袖石は巨石を立てて使っている。奥壁は一枚石を使っているが、恐らく現存する一枚石の上に、同様の石が乗っていたものと思われる。床面には拳大の礫が全面に敷かれているが、この礫は閉塞石の下までは達していない



第3図　墳丘・列石・石室全体図



第4図　石室展開図

第5図　石室平面図

模様である。なお、天井石と思われる石材は近辺に残存していない。また、石室東南側壁が内側に倒壊しており、石室内の調査は完了していない。

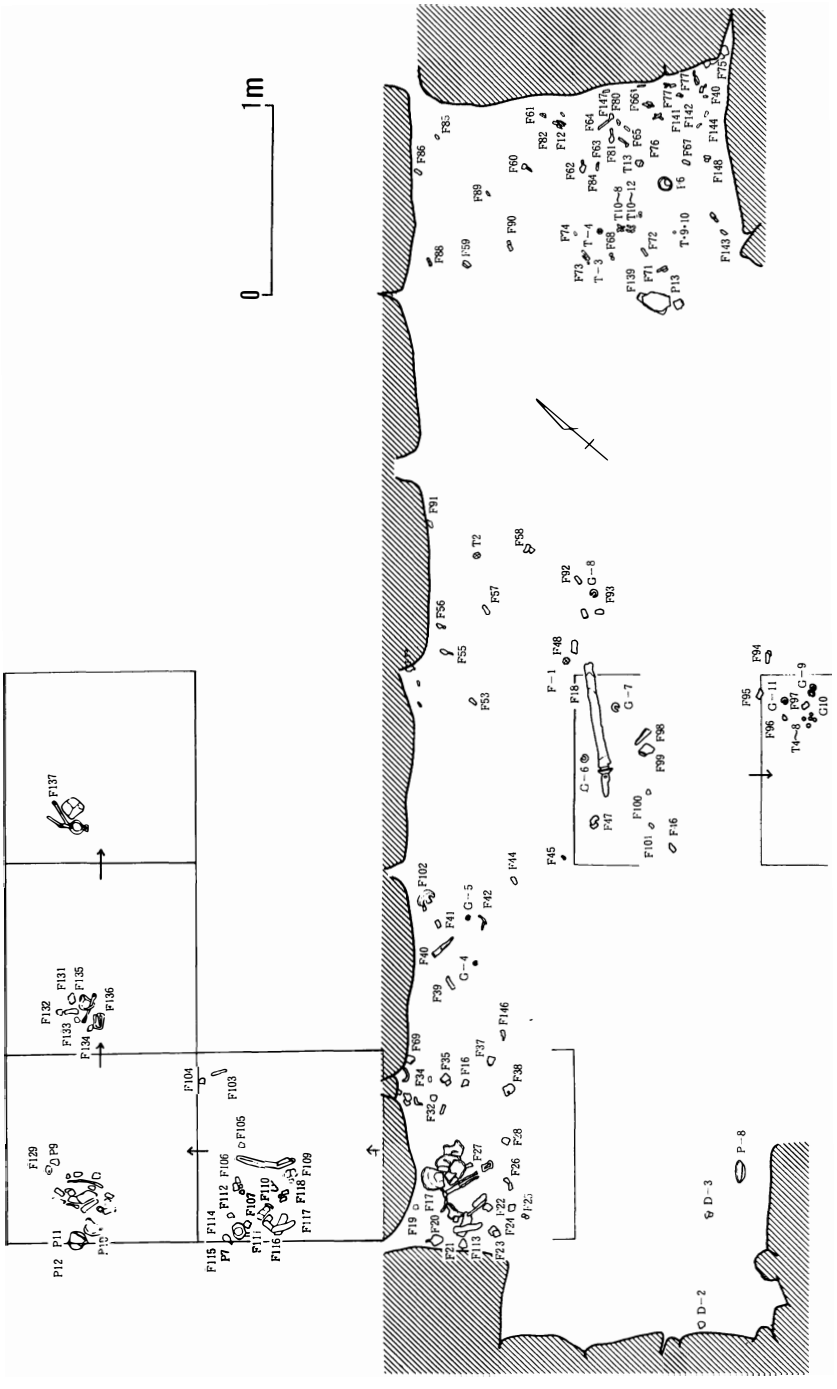
2．出土遺物

⑴　遺物出土状態

本古墳に伴う遺物は、石室内と石室入り口部から出土している。このほか墳丘上の列石近辺からも出土している。

石室内では閉塞石と玄室の境、袖部、石室中央部、奥壁付近に別れて分布している。閉塞石部分は、銅鋺や平安時代土師器、須恵器甕破片が多く、袖部からは、馬具、甲冑、鉄鏃須恵器が重なって出土しており、最も遺物の多いところである。石室中央は、象嵌装飾円頭大刀、金環、玉等がまとまっている部分である。

奥壁部分では鉄鏃、玉、刀子、須恵器等が集中しており、特に東南側の壁に近い部分が多い。石室が倒壊している側は遺物



第６図　遺物出土位置図

の遺存状態が良好である。

⑵　土師器（第７図）

坏（１～７）胴部に段を持つもので、１、３は暗褐色で内外面の磨きが良好にされる。２、４は内外面赤色顔料が塗られているものである。断面半球状の椀形を呈する４～７は、４が内外面黒色土器であり、６は小型、７はやや深い器形を呈する。

８、９は高坏の脚部であるが、脚の短い高坏と思われる。

10は広口の小型壺で、口縁部には刷毛目が見られるが、胴部は篦で良好に磨かれている。口縁部外面には段があり、本土器の特徴となっている。器高10.1㎝、口径9.7㎝である。11は球胴甕の底部であろうか、あるいは弥生末～古墳時代初頭の壺の底部であろうか。

⑶　須恵器（第７～11図）

坏（12～19）口縁部に受け部を持つ坏で、受け部が長く立ち上がっているもの（12～15）と、低く内側に折れているもの（16～18）、あるいは受け部の外に突き出す部分が消失し、くの字に屈曲するもの（19）などがある。また、坏の直径は９㎝、10㎝、11㎝、12㎝、13㎝のものに分けられるが、12㎝前後の物が多い。体部は球胴と直線的な物があるが、口縁部受け部が短小化してくると体部が直線的な形態となる。

坏蓋（20～26）は７点が出土しているが、外面に沈線又は稜線が見られるもの（20～23）と、横撫整形だけのもの（24～26）があり、前者は11㎝～14㎝であるが、後者は11㎝以下である。最大の22は外面に稜を持っており、この蓋の中では最も古そうなものである。20、21、23はこれに続く時代で、24～26は最も新しい。

瓶（27、28）は口縁部と底部を欠いているが、注口部が残っていることから時期的な把握ができる。２点とも注口部は突出し、瓶の形態では終末の様相を呈する。27は胴部最大径の部分に２本の沈線と櫛歯状刺突文が施されるので、28よりは古そうである。

平瓶（29、30）は２個体が復元実測された。29は膨らみの強い体部で、底部は平底に近いが、胴部中央に平行線が２本巡っている。口縁頚部に平行線があり、口縁部は外反した角口縁である。30は球胴最大部に平行線が巡らされ、口縁部は短く筒状を呈し、僅かに外反し先端は丸口縁である。

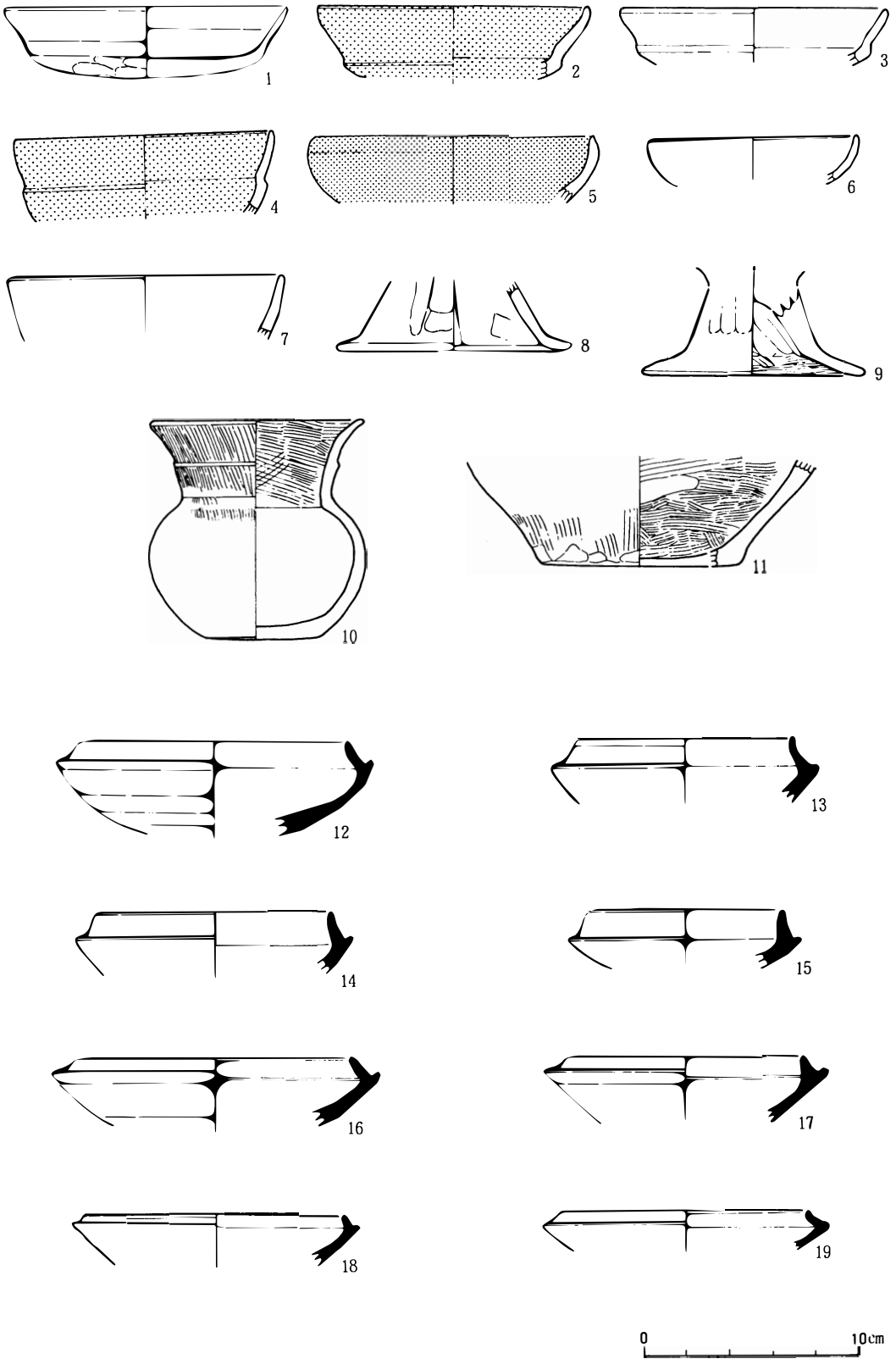
31～34は底部破片で、32、33は「×」の窯印がヘラで陰刻されている。

提瓶（35、36）は２個体出土しており、どちらも体部外面に同心円状の掻目がある。35は直径20㎝、36は直径16.6㎝である。口縁部は２点とも破損しているが、36は肩部に鉤状の把手が付けられる。こうした把手は鉤状が古く、環状、円形貼付文という順で新しくなるのが一般的であるが、鉤状のものも７世紀にまで残るものもある。

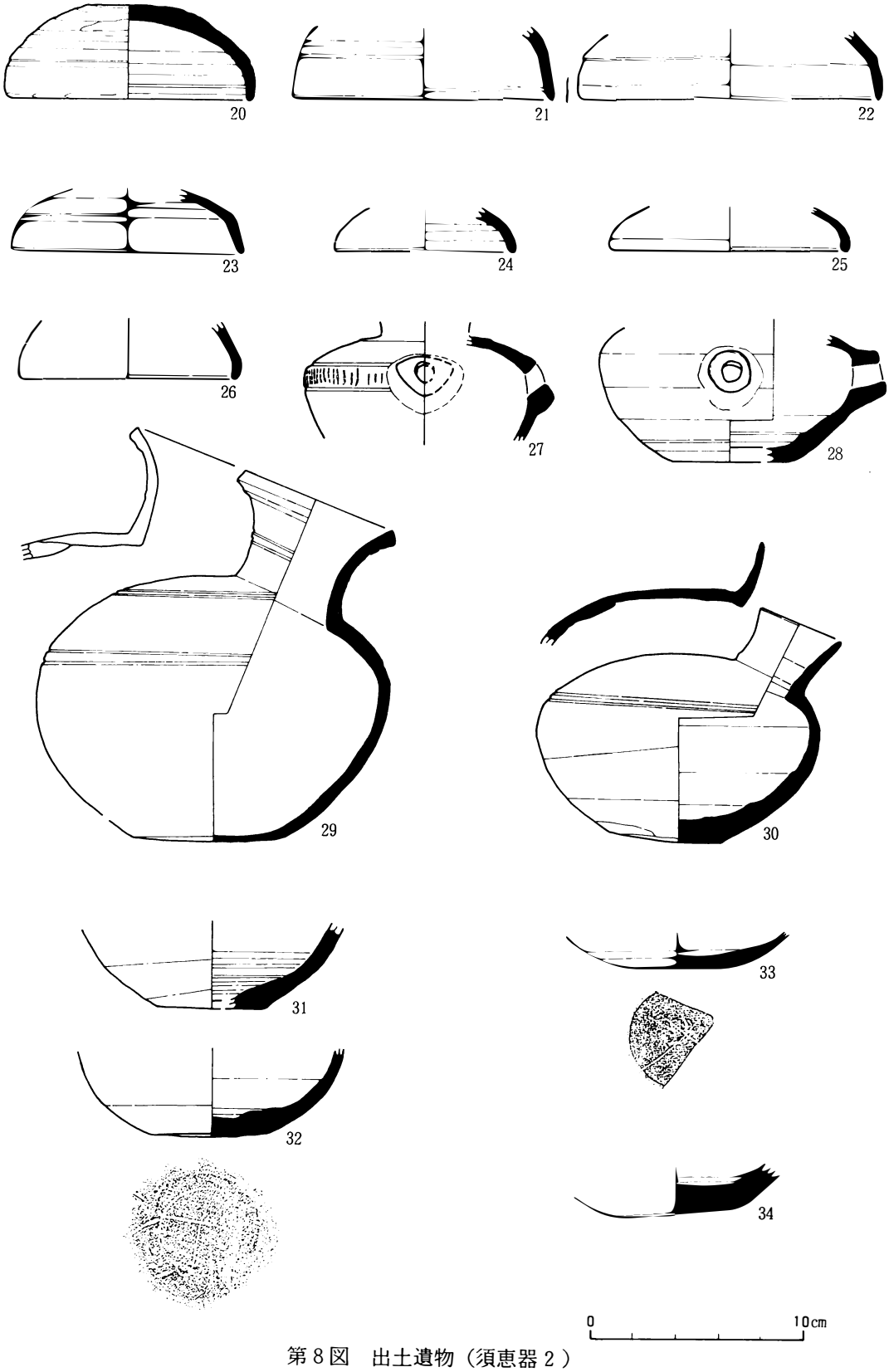
37～57は大型の甕の破片である。37～41は甕の口縁部で、形態のバラエティーが認められる。口縁部には櫛歯状工具による刺突文、波状文などがある。同部の破片は外面に平行叩目文があり、内面には青海波文が残るものもある。

⑷　鉄製品（第12～18図）

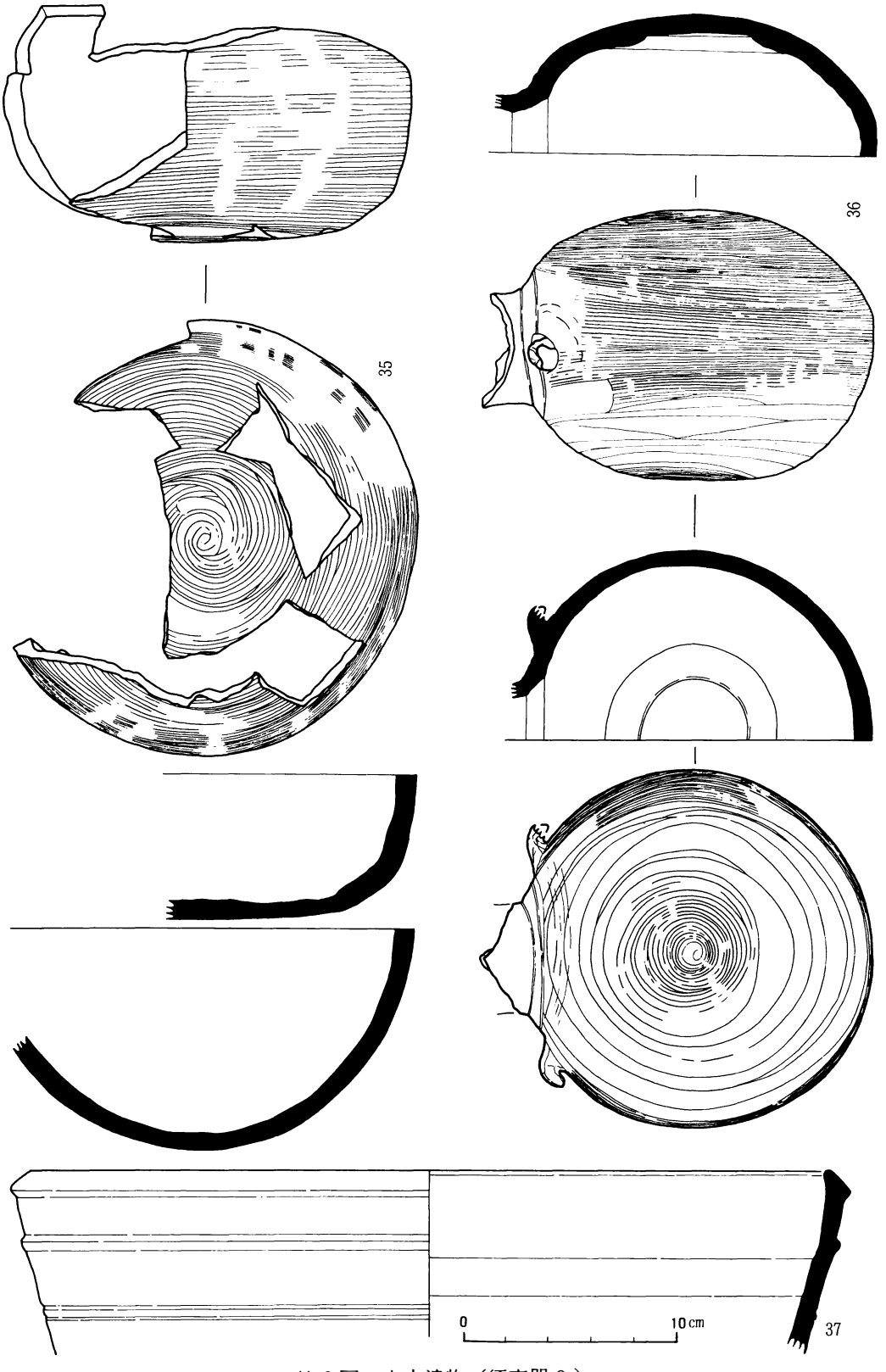
鉄製品には武器、馬具、甲冑がある。



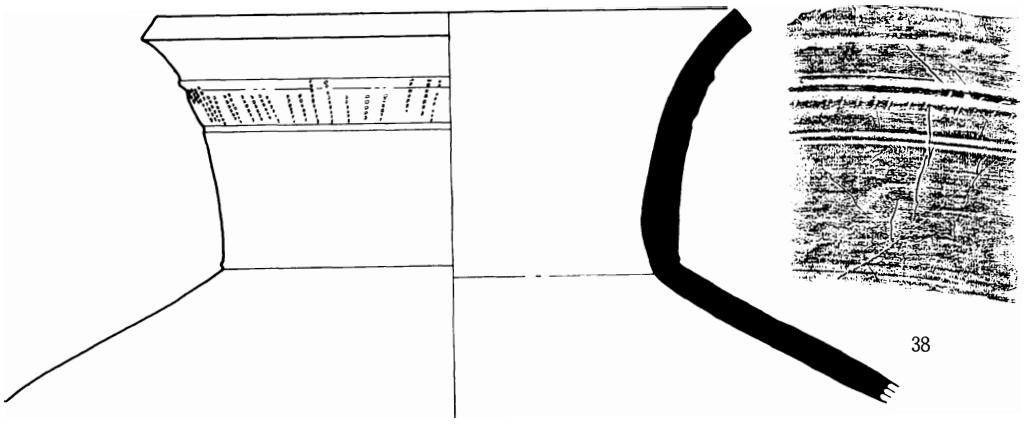
第７図　出土遺物（土師器・須恵器１）

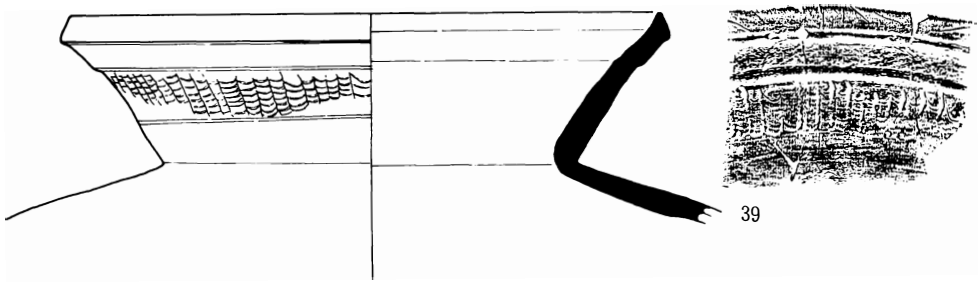


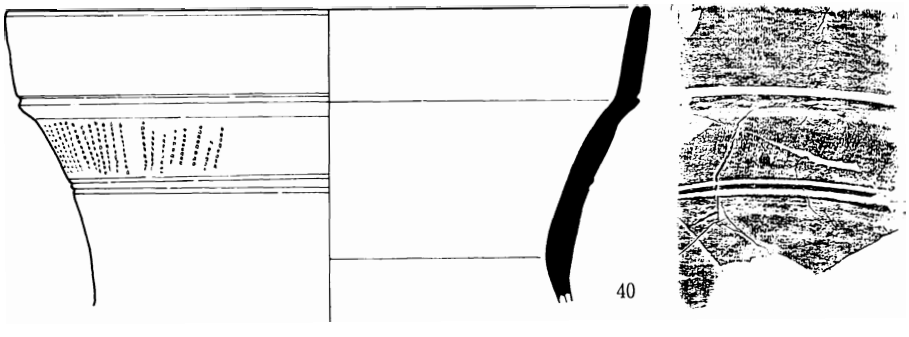
第８図　出土遺物（須恵器２）

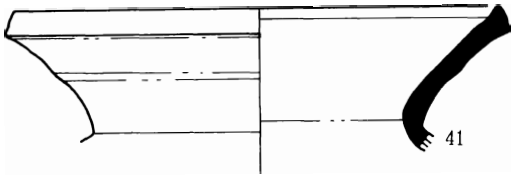


第９図　出土遺物（須恵器３）

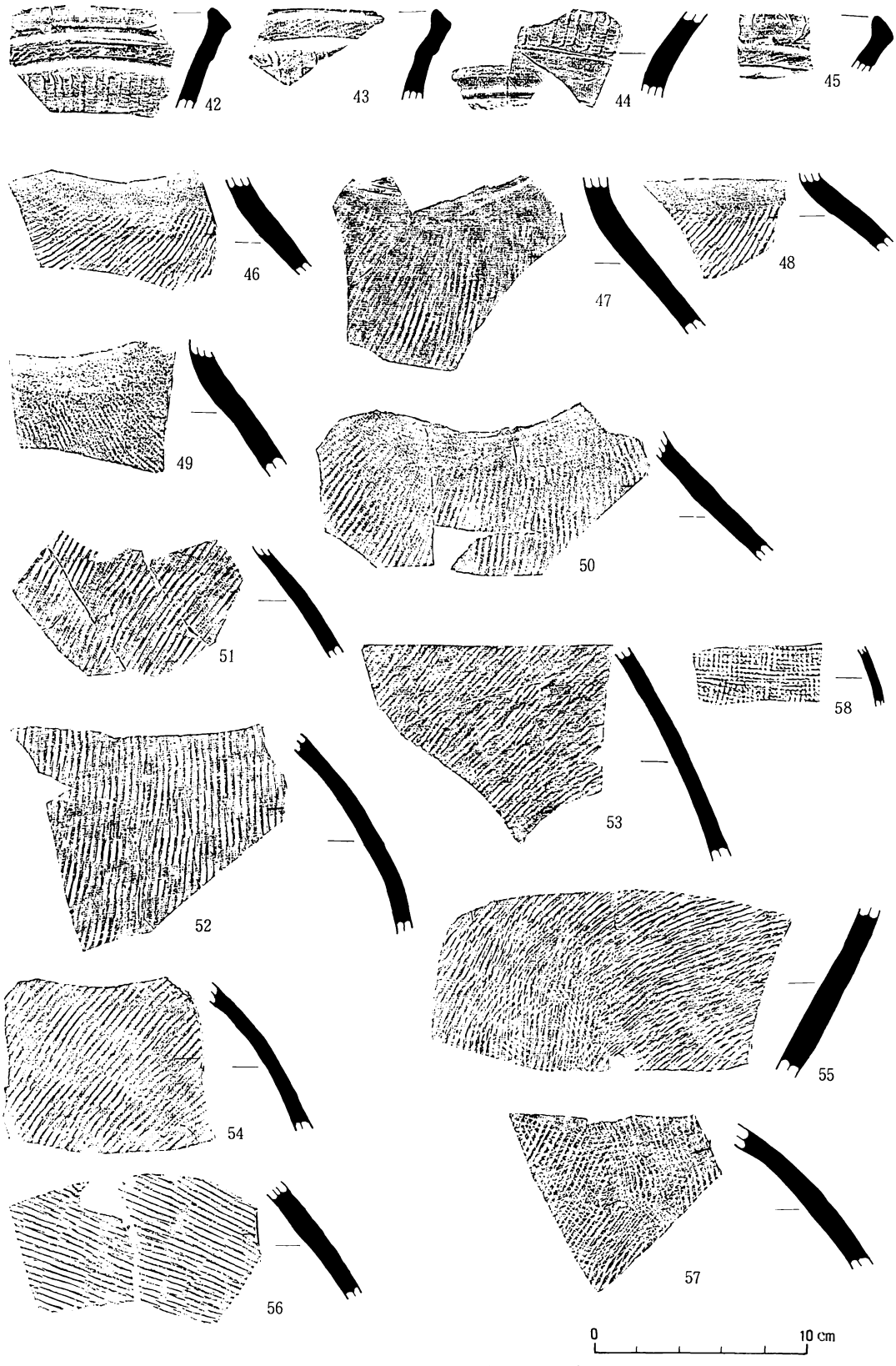




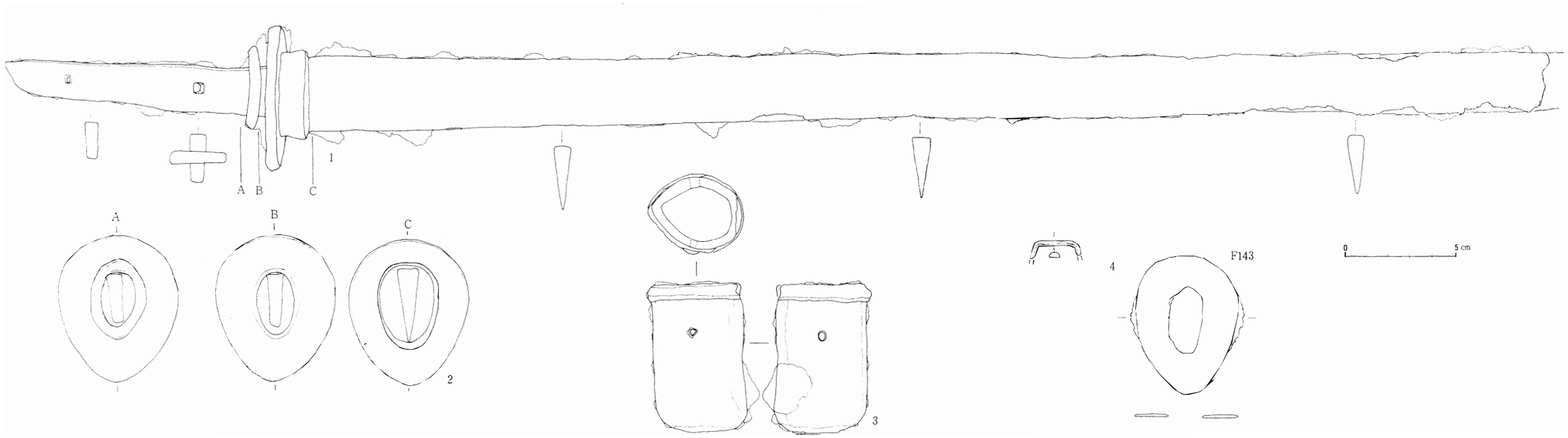




第10図　出土遺物（須恵器４）



第11図　出土遺物（須恵器５）



第12図　出土遺物（直刀・円頭把頭・鍔）

① 武器

直刀（第12図１、２） 石室中央部床面上に主軸方向に沿って置かれていた。全長69㎝、刃渡り55㎝、鍔から莖先までは11.5㎝、身幅は切っ先で2.6㎜、莖（なかご）部に近い部分で3.4㎝である。刃關（はまち）は鍔や脛巾（はばき）によって覆われており、形態は不明であるが、両關（りょうまち）の可能性が高い。倒卵形鍔の刃側に脛巾、把側に把縁金具が見られる。莖には目釘穴が２カ所あり、１カ所に目釘が残っている。この鍔及び附属の金具には銀象嵌が見られる。象嵌については、附編で述べる。

円 筒把頭（第12図３） 直刀の南側から出土したもので、長さ6.5㎝、断面長軸4.4㎝、短軸3.5㎝の断面倒卵形を呈している。体部に『懸』を通す懸通孔がある。これにも銀象嵌が検出されている。

刀装具（第12図４） 銅製の足金物であろうか。

刀子（第13図１～12） ここには刃渡り20㎝以下の短刀、及び小刀を含めている。11は身幅が2.5㎝あり、直刀の残欠かもしれないがいちおうここに含めた。１は全長25㎝、刃幅2.8㎝の平造りの両關造りで、鋏（きっさき）先端が欠損しているが、形状から上に尖っている可能性がある。刀身部には鞘の木質部が一部残っている。莖は長さ６㎝、先端幅１㎝であるが、若干欠けているかもしれない。

② 馬具（第13図13、第14図、第15図）轡・鐙・鉸具・面繋等３繋の革紐に付けられた飾り金具・雲珠等が出土している。

雲珠 13図13は雲珠残欠で石室底面から出土しているために、土圧がかかり中空の半球体が破損し、広がっている。このため、直径と脚の数がはっきりしないが、復元実測したものを左に図化した。これによれば、半球の直径は７㎝、高さ2.5㎝で、下部に４条の沈線が巡らされる。脚数は５脚と推定され、方形脚の中央に鋲が１個ずつうがたれている。

鐙 14図14、15は木製壺鐙を付けた鐙の鉄製部分で、下端に逆Ｕ字形の金具が付けられ、２本の鋲が木製壺鐙を留めた。鉸具と逆Ｕ字金具との間は、環状の鉄を四つに曲げて中央部にＵ字金具を組み合わせ、先端の環状部には鉄棒を使って、鉸具を取り付けている。Ｕ字金具の鋲が２本である事から、６世紀第３四半期以降に位置付けられる。

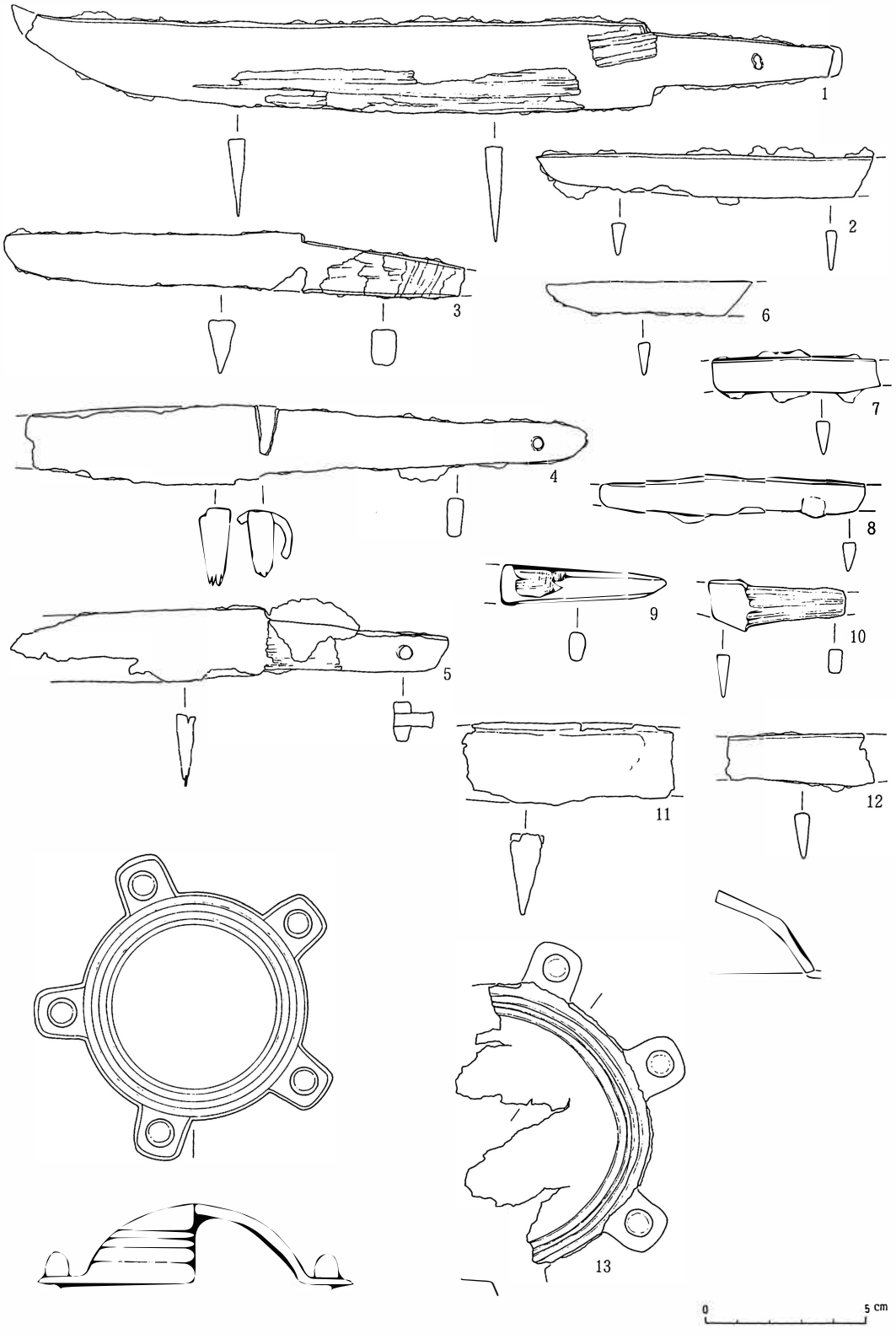
轡 15図16は轡で、銜部分は２連銜で引手・瓢簞型環状鏡板が残っている。一部欠損しているが、ほぼ完全である。

鉸具・飾り金具 15図18～29は鉸具及び馬具に伴うと思われる飾り金具である。しかし、後述するように小札等が出土していることから、甲冑に使用された鉸具もあるかもしれない。

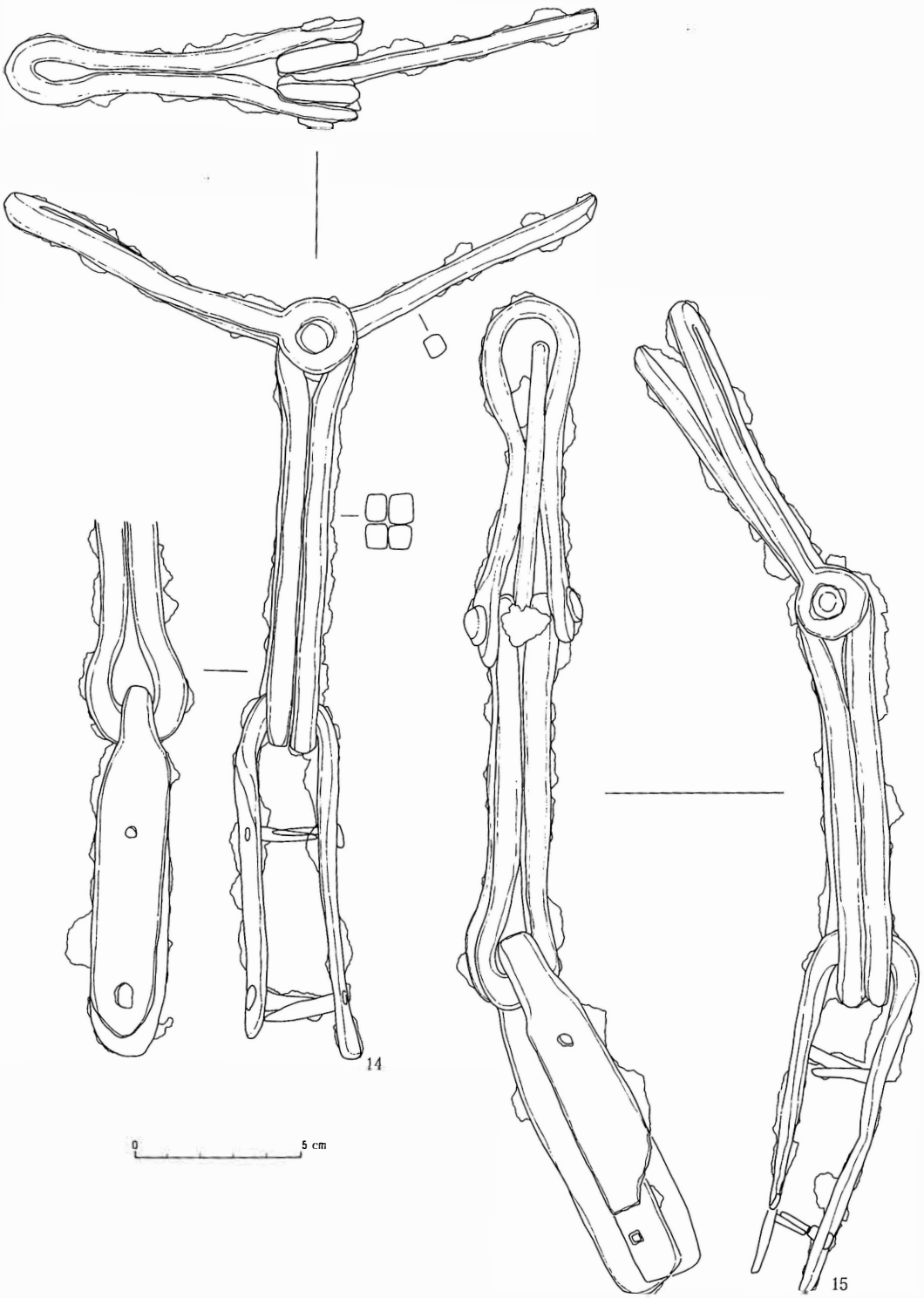
鉄鏃 16図は鉄鏃であるが、このほかにも莖部分や先端部分の残欠があり、点数は倍以上である。１～４は有棘篦被五角型式で、２～４は腸抉が見られる。５、６は腸抉柳葉式、７～10は類柳葉三角型式、13～27は棘篦被鑿箭式である。22までを平根鏃、23以降を尖根鏃と言えよう。

③ 甲冑・小札類

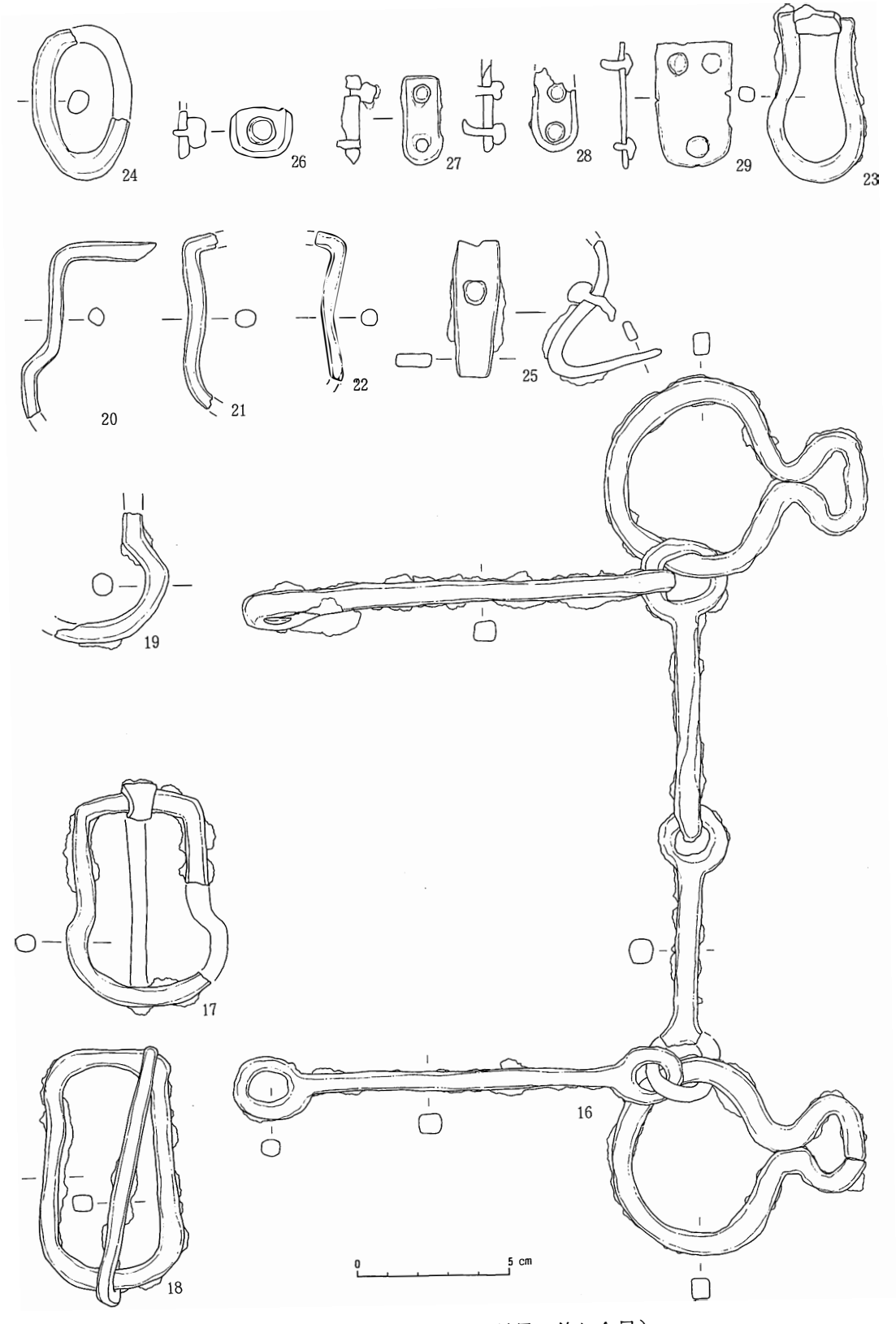
17、18図に載せたものである。これらは方形のものと、短冊形のものに分けることができるが、方形のものは長辺が9.8㎝と、８㎝の２種類があり、短冊形は幅の差や尖端の形態が丸・四角・



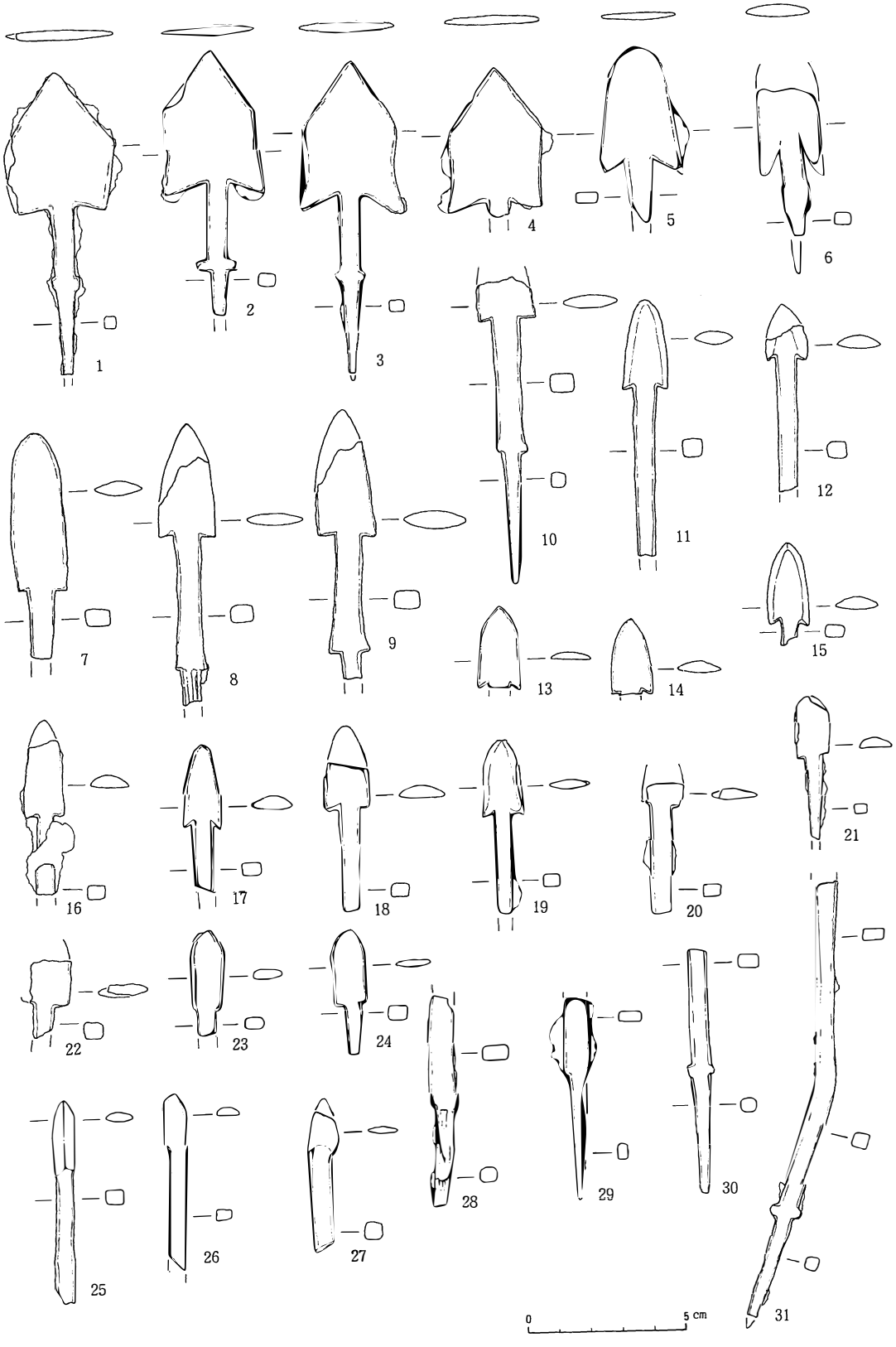
第13図　出土遺物（刀子・雲珠）



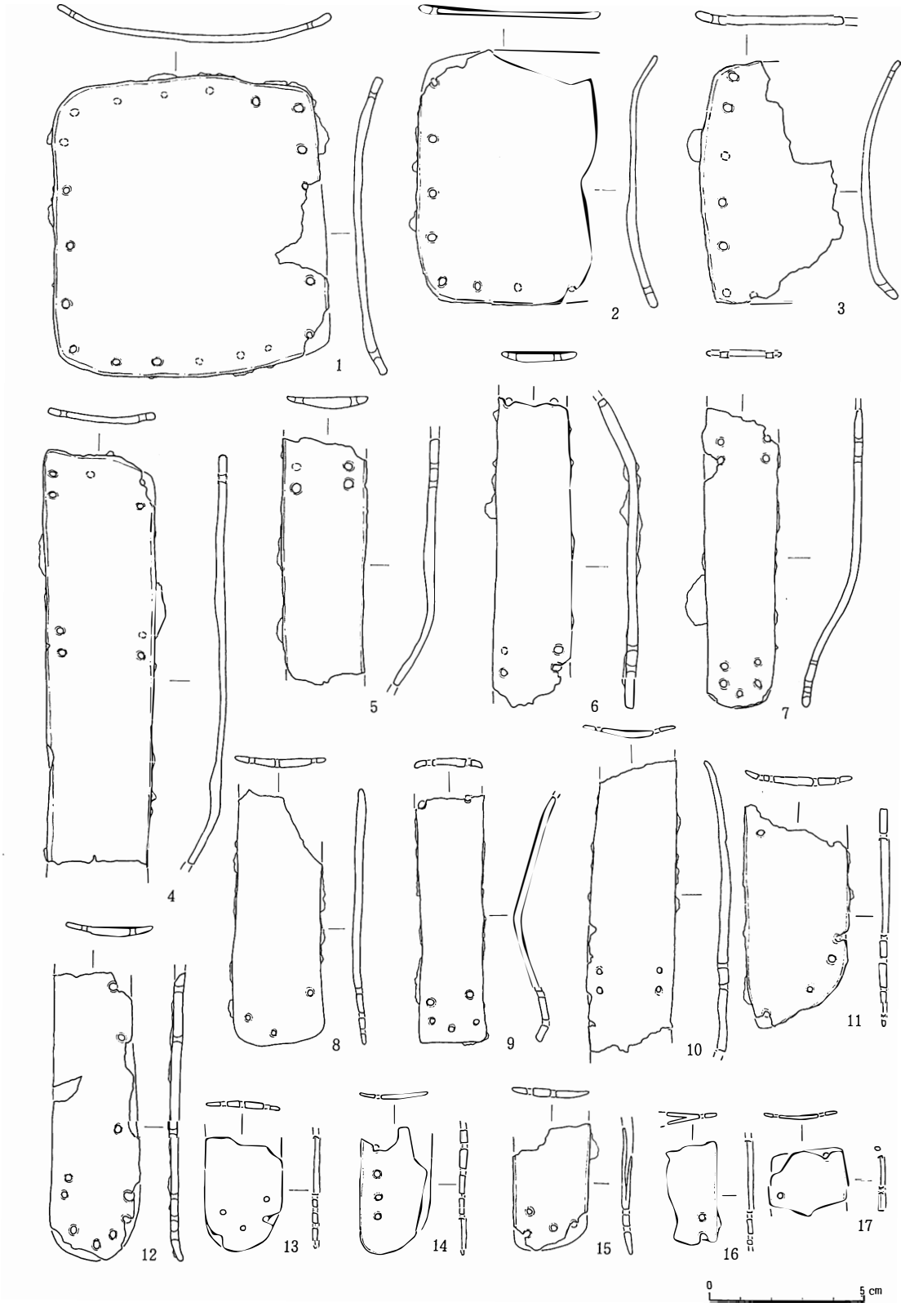
第14図　出土遺物（鐙）



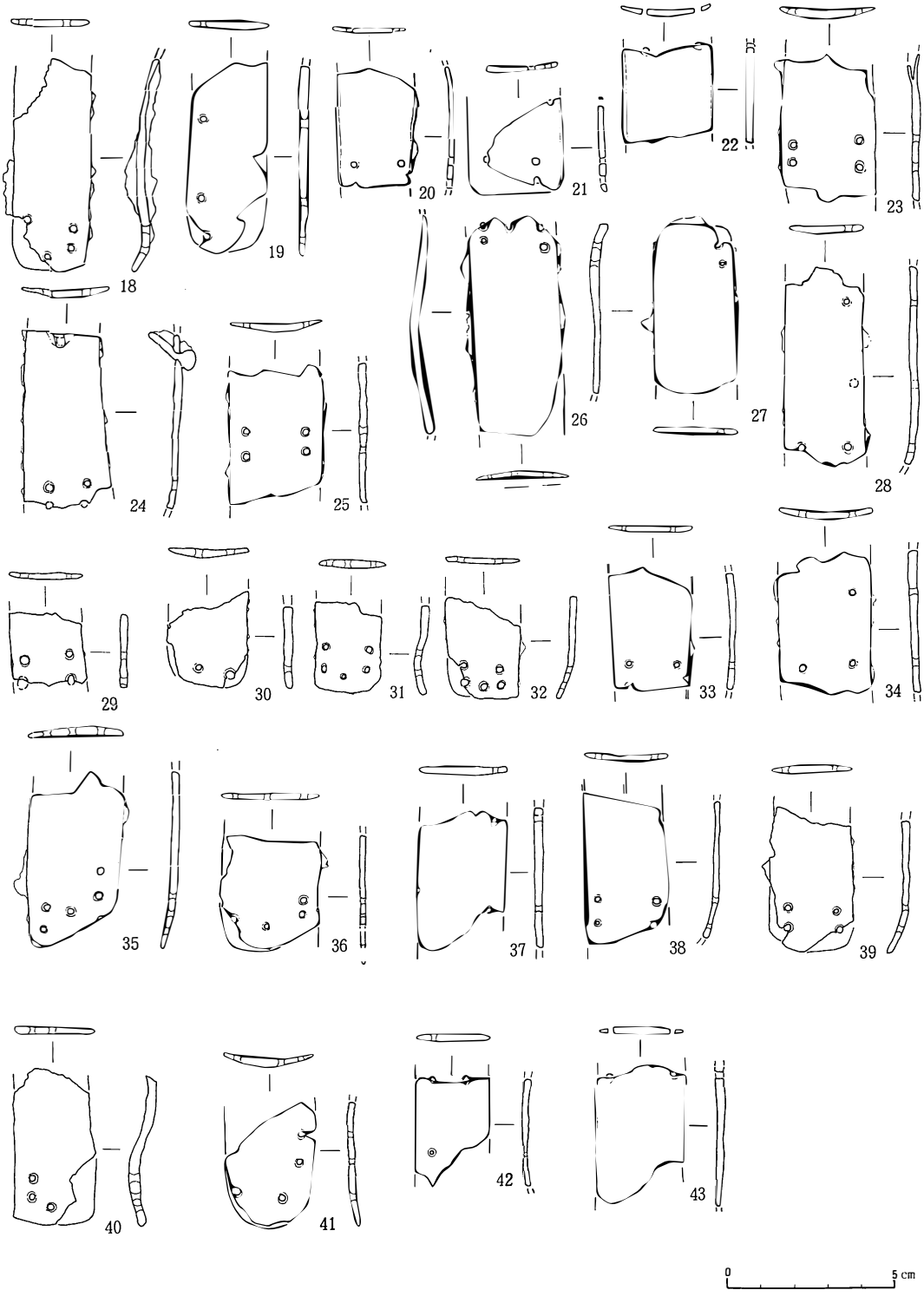
第15図　出土遺物（轡・鉸具・飾り金具）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
5 cm

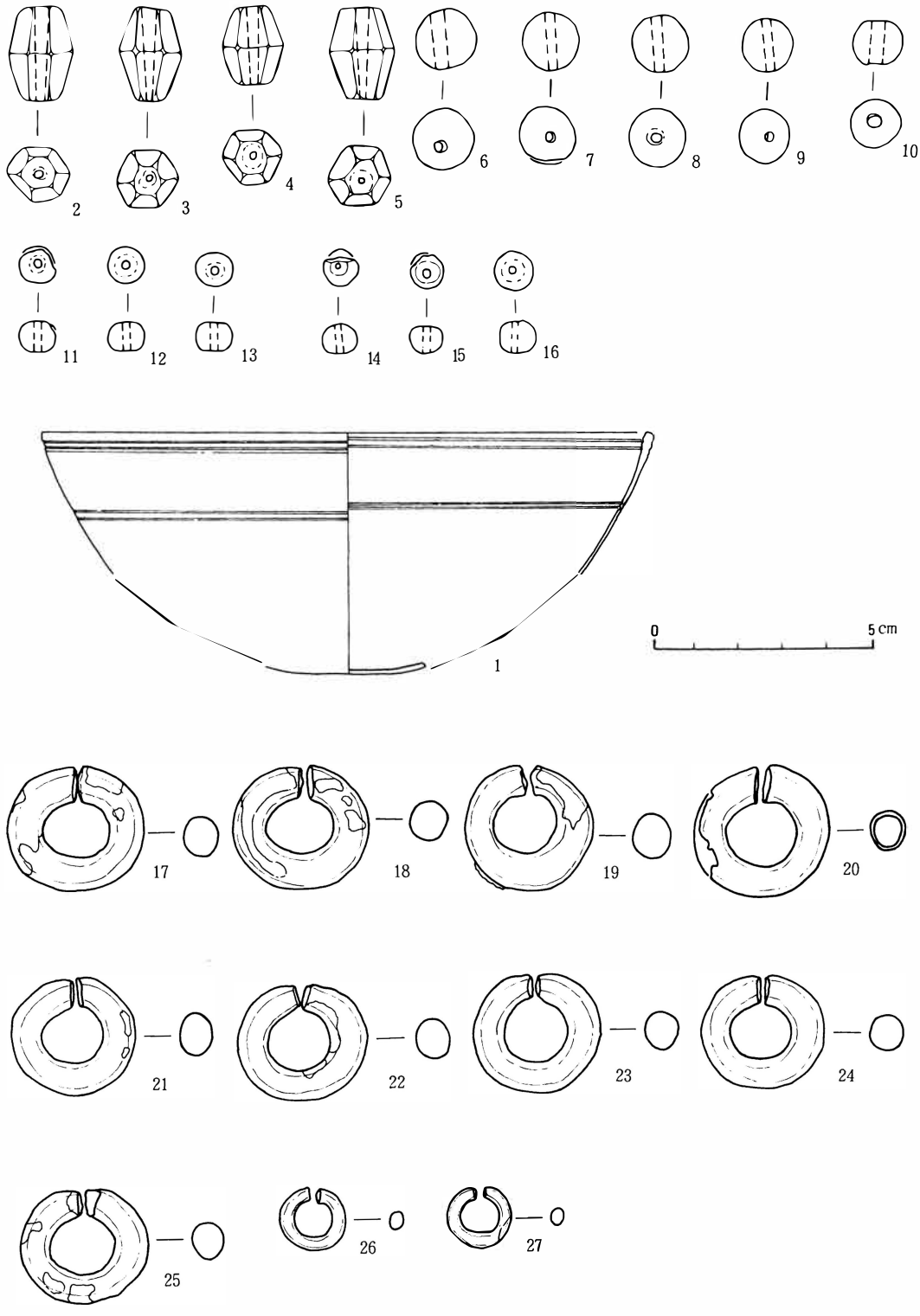
第16図　出土遺物（鉄鏃）



第17図　出土遺物（小札１）



第18図　出土遺物（小札２）



第19図　出土遺物（銅鋺・玉・金環）

三角という違いがある。更に小札の小孔の位置、数によっても差があるが、甲冑のどの部分なのか不明である。なお、これら小札の小孔には鉄製の鋲が残っていないことから、革紐によって綴られたものと思われる。

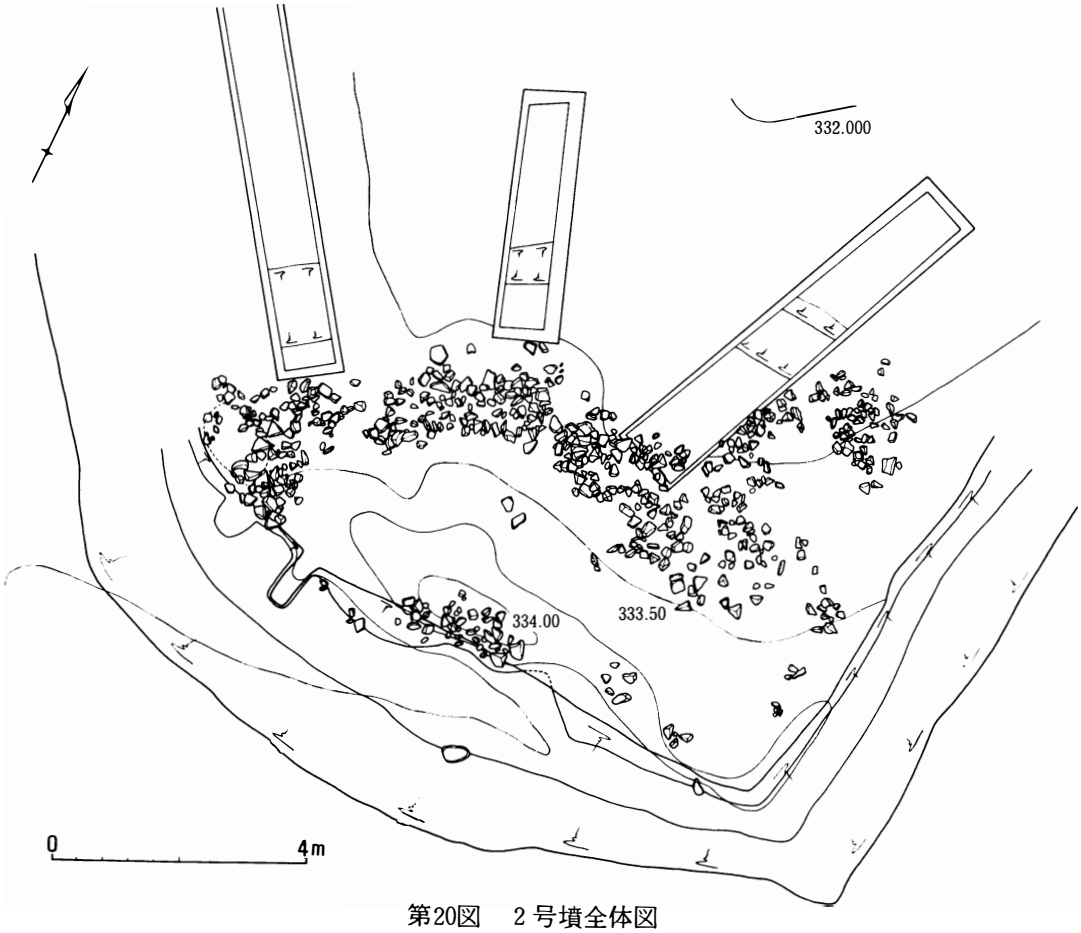
(5) 銅鋺

19図１は銅製の鋺（わん）で、破損していた３つの破片から復元実測したものである。銅鋺は胴部が膨らまないで直線的に広がる浅い鋺で、底部は僅かに平坦面が見られる。口縁部は厚さ２㎜、胴部は１㎜以下である。口縁部と胴部上部内外面に１～２本の条線が見られる。遺跡での発見状況は、４～６破片となって床面及び床上の土に含まれていたが、どちらかと言えば、石室南側に多く分布していた。

(6) 装身具

玉類　19図２～15が出土しているが、２～５は水晶製切り子玉で、穿穴は片側から行われている。２は長さ21㎜、３は21㎜、４は18㎜、５は20㎜である。６～15は土製丸玉で、６～10は直径1.1～1.4㎜、11～15は直径８㎜の玉である。

耳飾り　19図16～26に示した金銅製の金環で、直径３㎝前後のものと1.5㎝位のものに分けることができる。



第20図　２号墳全体図

第２節　２号墳

本古墳は１号墳の南東に接してつくられているが、墳丘の３分の２を開墾によって削平され、石室及び墳丘は見る影もない。墳丘を取り巻く礫群は、直径９ｍ余り、墳丘の高さ１ｍ程である。出土遺物は鉄片１、須恵器甕破片若干、そのほか縄文時代～弥生時代の土器・石器が墳丘から出土している。

なお、この周辺は東山南遺跡と言われており、周溝墓か古墳の周溝と思われる、方形・円形の溝が幾つか発見されている。２号墳のような古墳が削平されてしまったものであろうか。

第３節　３号墳

１号墳北側に僅かにマウンドをもつ小丘があり、これを３号墳と名付けた。調査の結果は、単なる土盛りで、土は柔らかく遺構らしきものは検出されなかった。なお、近くから近世の五輪塔の空風輪が出土しているが、墳丘とは関係なさそうである。

第Ⅳ章　考　察

第１節　遺物の年代

須恵器　坏12～15は中村浩氏の陶邑編年（1981　『和泉陶邑窯の研究』）によればⅡ－４～５期に位置し、17～19はやや下ってⅡ－６期にあたろうか。猿投窯の編年（楢崎・斎藤　1983『愛知県古窯跡群分布調査報告書（Ⅲ）』）では前者を東山50号窯式（７世紀前半）、後者を岩崎17号窯式（７世紀第３四半期）あたりに比定できる。なお、田辺昭三氏編年（1981　『須恵器大成』）では、前者がＴＫ43～ＴＫ209（６世紀第４四半期～７世紀初頭）、後者がＴＫ217（７世紀前半）という年代が得られる。坏に伴う坏蓋もこれと矛盾するものではない。瑞27・28は高台がつかないことから、中村編年ではⅢ－１期以前、楢崎編年では岩崎17号窯以前で、さほどさかのぼらない時期と考えられる。平瓶は胴部に膨らみが残っているし、口縁部が胴部に比べて短いことから、東山50号窯式以前であろうか。提瓶の把手は鉤状把手→環状把手→ボタン状把手と変化するようであるが、35・36の提瓶は口縁部を欠いているために年代を絞ることが困難である。しかし、他の須恵器と大きく差のあるものではないだろう。

象嵌飾円頭大刀　この編年は橋本博文氏（1986　「金銀象嵌飾円頭大刀の編年」『考古学ジャーナル』№266）によって進められているので、これを参照して年代観を出しておきたい。本古墳出土の象嵌は既に大部分が剝離しており、明確な文様を把握することは困難であるが、橋本編年のＡ－１－ａ類の５段階、群馬県高崎市付近出土のものか、Ａ－１－ｂ類の４段階群馬県岩鼻例に類似している。第４・５段階は６世紀後半のＴＫ43～ＴＫ209に位置付けられているので、須恵器坏の前者編年の年代と一致する。

馬具　瓢形素環鏡板付轡は、坂本美夫氏によれば（坂本美夫　1985　『馬具』ニューサイエンス社）、６世紀第３～４四半期に位置付けられるというが、立聞の長さと幅の比率が70％を越えるものは、第４四半期に入ると言う。本古墳出土轡の立聞は75％である。また、木製壺鐙の逆Ｕ字金具の鋲が２本であるところから、６世紀第３四半期以降の可能性が高いことは既に述べ

た。この坂本氏の編年の外に斎藤弘氏の研究（1986　「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号）がある。氏の説では７世紀中葉頃となるが、この他の本墳出土遺物から見れば、もう少し古くすることができるのではなかろうか。

銅鋺　本古墳出土銅鋺は、一般的な丸底球胴で口縁部が直立するものと違って、腰が張らずに口縁部まで外傾したままの浅い鋺である。このような例は、千葉県関向古墳から出土したものと類似しており、毛利光俊彦氏の分類・編年（1978　「古墳出土銅鋺の系譜」『考古学雑誌』64－１）によれば、無台鋺ＡⅡ類に分類され、７世紀前半に位置付けられている。これは、千葉・関向古墳の出土品である環頭大刀・馬具が、同県・金鈴塚古墳のものと類似することから、得られた年代であるという。

以上の遺物から、本古墳は、６世紀後半の中頃に築造され、最初の埋葬があった後、７世紀中頃までに数回の追葬があったと考えられよう。

第２節　歴史的位置

本古墳の調査によって得られた成果は大きく、古墳時代後期の６世紀末～７世紀初頭の中道古墳群勢力は、前期以来有力豪族として存続し、中央勢力と直接的かあるいは間接的に結び付いていたことが明らかになったことである。これは、象嵌装飾円頭大刀および銅鋺の出土によって裏付けられた。

象嵌装飾円頭大刀にある象嵌の亀甲繋文は、中国北朝・高句麗美術の影響を受けているが、ここから百済に入ったモチーフと、象嵌技法とが結び付いて一部は倭向けに百済で製作され、残りは日本の百済系渡来工人が量産したと考えられている（橋本博文　1986）。この亀甲繋文象嵌円頭大刀をはじめ、圭頭大刀・頭椎大刀・双龍環頭大刀の出現時期は、聖徳太子・蘇我氏による物部氏の打倒（587年）の頃で、単鳳環頭大刀にかわって出現したが、この時期は、最古の仏教寺院が建立された時期と符合し、銅鋺のような仏教的色彩の強い遺物と伴出する場合が多い。蘇我氏などによる仏教文化導入と、大陸の新しい文化の伝播が、日本の儀刀の制度に影響を与えたものと言う説もある。

橋本博文氏によれば、このような装飾大刀の佩用者は、全国の出土古墳の規模から、地域小首長か有力家父長層と推定しているが、本古墳でも出土遺物・古墳内部構造などから、同様なランクの人物が埋葬されていたのではなかろうか。

県内の６世紀後半の関係遺物を見ると、寺の前３号墳（春日居町鎮目字寺の前1423－７番地）から、単鳳環頭大刀把頭が出土しているが、これは非含玉単鳳環頭大刀の龍王山系列に属するもので、福島県いわき市大志田古墳出土例と類似している。単鳳環頭大刀について、穴沢咏光・馬目順一氏は「環頭大刀の刀制が龍王山系列に統一された第Ⅲ－Ⅳ段階の画期に、文献史上の事件をあてはめることがもしも仮に可能だとすれば、571年の敏達即位による物部氏主導の政権発足がもっとも考えやすい」（1986　「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布」『考古学ジャーナル』266）と言っている。仮に穴沢氏らの想定が正しければ、寺の前3号墳の被葬者は物部氏系列の有力者であったと見ることができよう。しかし、北東20mに寺の前古墳、北西50mに狐塚古墳があり、両方の古墳から銅鋺が出土している。両古墳の築造は6世紀後半といわれるが、銅鋺

甲斐国古墳の変遷

(凡例◀前方後方墳◀前方後円墳⊖竪穴式石室・円墳●帆立貝式古墳■方墳●円墳⊖横穴式石室・円墳)

地域 時期	北巨摩	竜王・敦島・ 甲府西部	御形・甲西 白根	三珠・豊富	中道	境川・八代	御坂・一宮	春日居・山梨 勝沼	甲府東部 石和	大月・上野原
弥生時代　後期		金の尾遺跡 方形周溝墓群					田村遺跡 方形周溝墓			
AD300	坂井南遺跡 方形周溝墓群			一城林遺跡 方形周溝墓群	上の平遺跡 方形周溝墓群			西田遺跡 方形周溝墓群		
50					◀小平沢古墳 ◀大丸山古墳 ◀銚子塚古墳	(■ 竜塚) ◀岡銚子塚古墳				
AD400			◀物見塚古墳 ? 法華塚		⊖丸山塚古墳 ◀天神山古墳	●亟塚	姥塚遺跡周溝墓 ⊖亀甲塚古墳			
50			●六科山古墳	●鳥居原狐塚 ◀王塚古墳 ●大塚	⊖かんかん塚	⊖八乙女1古墳 ◀八乙女2古墳 ◀狐塚古墳 ◀団栗塚古墳				
AD500	⊖天王塚古墳	⊖万寿森古墳 ⊖加牟那塚古墳 ⊖二ッ塚古墳 ⊖敦島大塚古墳	●熊野神社古墳 ⊖おつき塚古墳	●三星院古墳	⊖博物館構内墳 ⊖稲荷塚古墳	⊖表門神社古墳 ⊖荘塚古墳 ⊖地蔵塚古墳 ⊖口明塚古墳	⊖弾誓塚古墳 ⊖姥塚古墳 ⊖国分寺地古墳 ⊖四ッ塚古墳群	⊖天神塚古墳 ⊖寺の前古墳 ⊖笹原塚古墳	⊖横根39号墳 ⊖大蔵経寺15墳 ●積石塚古墳群	⊖子の神古墳 ⊖金山古墳
AD600	⊖湯沢古墳	⊖竜王三号墳 ⊖竜王二号墳				⊖御崎古墳				
AD700										

(T.Sueki作成 1981.4.6竜王町郷土歴史教室資料 1988.3加筆訂正)

第21図　甲斐国古墳の変遷

は無蓋の球胴をした銅鏡、7世紀前半に位置付けられている。銅鏡仏教文化にかかわるものとすれば、壬生氏や蘇我氏との結びつきが想定できる。寺の前3号墳とこれらの古墳の築造～追葬の間に、甲斐国でも主導権の移動があったかもしれない。また、この主導権の移動の時期に、中道勢力（稲荷塚被葬者）が何等かの役割を担った可能性が生まれよう。

ま　と　め

曽根丘陵東山とその周辺にある古墳群の性格は、とかく前期古墳の前方後円墳などに耳目が集まり、後期古墳は見落とされがちであった。昭和54年度以降、甲斐風土記の丘公園内にある遺跡や古墳の整備に伴って、遺構の確認調査を進めて来たが、61年度の博物館構内古墳の発掘と62年度の稲荷塚古墳の調査は、東山古墳群の性格を明らかにする上で貴重な発見となった。

それは、前期の国造クラスの豪族が、古墳時代後期に至っても地域的には有力豪族として、存在していたことが、出土遺物から判明したことである。銀象嵌装飾大刀と銅鏡・甲冑はこの地の豪族の質の高さを示すものであろう。

本調査に参加された方々をはじめ、象嵌装飾大刀・銅鏡などの保存処理・分析に関与していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

附　編

1．稲荷塚古墳石室を構成する岩石について

山梨文化財研究所　　河　西　　学

稲荷塚古墳は、曽根丘陵を構成する東山の甲府盆地側の先端部に位置している。石室を構成する石材は、大部分が中粒～粗粒の輝石安山岩であり、大きさは0.2～１ｍ（最大1.5ｍ）と多様である。安山岩は一般に塊状でやや緻密～やや多孔質のものが多く、ときに板状の節理を示すものもみられる。石室以外に古墳の周囲にみられる礫は人頭大で、多くの輝石安山岩のほかに泥質岩起源のホルンフェルス、緑色化変質した角閃石ディサイト・酸性～中性の凝灰角礫岩などからなる。以下に一般的にみられる安山岩について記載する。

〔岩石記載〕　　斜方輝石普通輝石安山岩（880820Ｆ16）

肉眼では、１～３㎜の斜長石・輝石斑晶を含む暗灰色塊状安山岩であり、石基は緻密である。鏡下では、斑状組織が発達し、斑晶鉱物は、斜長石・普通輝石・斜方輝石・不透明鉱物からなる。斑晶鉱物；斜長石は、0.1～2.5㎜の柱状自形結晶、累帯構造が顕著で双晶を示し、細粒ガラス包有物を含む。また一部集斑状を示し、アンデシン～ラブラドライト組成である。普通輝石は、0.2～３㎜、粒状～短柱状自形結晶、双晶・累帯構造を示す。斜方輝石は、0.2～2.0㎜、柱状自形結晶、普通輝石より少なく、ときに普通輝石とともに集斑状を示す。不透明鉱物は、0.1～0.5㎜、粒状、自形～半自形結晶で単独あるいは輝石にともなって存在する。石基は0.01～0.02㎜の斜長石・輝石・不透明鉱物・無色ガラスなどからなる極めて細粒の間粒状～塡間状組織を示す。石基の斜長石は柱状～針状で無秩序に配列するがときに方向性を持つ。

〔石材の産地〕

曽根丘陵に分布する曽根層群は、寺尾礫層・黒富士火砕流・佐久シルト層・韮崎岩屑流堆積物・原礫層などから構成される。寺尾礫層・原礫層などは御坂層群の緑色化した火山岩類の礫から主としてなる扇状地性堆積物である。黒富士火砕流は泥流状の無層理の軽石質堆積物で、デイサイト・安山岩などの礫を主として含み、緑色化した火山岩類、花崗岩類などを伴う。これに対し八ケ岳火山起源の韮崎岩屑流は、安山岩を主体とし、デイサイト・ホルンフェルス・花崗岩類などをわずかに伴う。

本遺跡周辺における韮崎岩屑流は、中道町役場東の露頭、銚子塚古墳から稲荷塚古墳に至る道路沿いの露頭などで確認され、暗灰色の火山性細粒砕屑物中に人頭大から１ｍをこえる巨礫の両輝石安山岩を主とした岩石が含まれている。役場東露頭では、黒富士火砕流の安山岩が緻密で硬質なのに対し、韮崎岩屑流のそれは多孔質かつやや軟質である。稲荷塚古墳周辺の畑地には、20～30㎝から最大1.2ｍの粗粒、塊状の両輝石安山岩を主体とする転石が畑地の境界に沿って人為的に集積されている。また抜根した桑園には、１ｍを越える安山岩が掘り起こされているのがよくみられる。これらは、韮崎岩屑流の細粒部が風化して礫が残され、あるいは洗い出されたものと考えられる。稲荷塚古墳の安山岩と岩質・大きさ・形状が酷似し、また遺跡の周辺地域で容易にこれらの安山岩が得られることから、稲荷塚古墳の石室を構成する岩石は、古墳周辺に点在していたこれらの韮崎岩屑流中の輝石安山岩礫が用いられた可能性が高い。

2．稲荷塚古墳出土直刀および銅鋺の保存処理

山梨文化財研究所　鈴　木　　稔

1）はじめに

本稿では山梨県東八代郡中道町稲荷塚１号墳より昭和62年８月に出土した直刀および銅鋺の保存処理について報告する。同古墳は直径約20ｍの円墳で、横穴式石室から直刀、銅鋺のほか、馬具、小札、金環などの副葬品が発見された。処理の内容は直刀の防錆・強化と象嵌の表出、銅鋺の錆の安定化処理であり、期間は昭和62年10月16日より昭和63年３月31日までである。なお、鉛同位体比測定により銅鋺中に含有される鉛の産地に関する知見が得られたのでこれについても報告する。本稿に関する写真は図版11に掲載した。

今回の保存処理については、以下の方々の御指導ならびに御助力を賜った。ここに記して深く感謝申し上げる次第である。

・銅鋺の鉛同位体比測定：東京国立文化財研究所　保存科学部　馬淵　久夫氏、平尾　良光氏
・直刀のＸ線写真撮影　：東京国立文化財研究所　保存科学部　三浦　定俊氏
・保存処理・修復の指導：東京国立文化財研究所　保存修復部　青木　繁夫氏
　　千葉県文化財センター　研究部　　服部　哲則氏

2）遺物の形状

(1) 銀象嵌装直刀

直刀は切先部を欠く全長約70㎝の刀身と把頭に分かれ、鍔は刀身に付着している。出土当初、象嵌の存在は認められず、調査担当者が錆落し作業を進めた結果、把頭および鍔の把側に銀線が発見され、銀象嵌装であることが判明し、以後の処理を筆者が担当した。

把頭　＜写真－１、２＞

鉄製。全長6.7㎝、把頭縁における横断面は長径4.2㎝、短径3.6㎝（外寸。厚さは約５㎜）の倒卵形。重量約134.9ｇ、把頭縁約７㎜の幅で厚くなっており、懸通孔を把頭縁から約⅓の箇所にあける。錆による表面の剝落や変形が著しく、Ｘ線写真[1]から推定した象嵌の残存率は１割に満たない。象嵌は佩裏と上下面に比較的良く残っているが、佩表と頂部にはごく部分的にしか残存しない。

象嵌の文様をさらに詳細に調査するため幅２～４㎝、長さ11㎝の短冊状に切ったフィルムを把頭の空洞内に挿入してＸ線の展開写真を撮影した＜写真－３＞＜第22図＞結果、象嵌の基本文様は亀甲繋文と判明した。即ち二重円文を３本の並行する直線で亀甲に繋いで把頭前面を９区画に分かち、そのうち文様の確認できた３区画には中心部分の形が互いに異なる三種の渦巻文を配している。中心部分は懸通孔周囲では５葉と見られる花弁文、そこより頂部側上部では三重円文、同じく下部ではＵ字形を組合せた文様となっているが、それらを取り巻く渦巻文と合せるといずれも鳳凰が翼を広げた文様に由来するものと考えられる[2]。文様は表裏対称と考えられるので６区画分の復元はほぼ可能と思われるが、縁側上面、下面および頂部の計３区画の文様については手掛かりが得られなかった。そのほか、把頭縁のやや厚くなっている部分に蕨

手文もしくは円文を並べ、そこから亀甲繋文に至る空間を、把側から見てＣ字形の弧文で埋めているのが確認された。

露出していた銀線は、光沢のない暗灰色を呈し、前記の弧文の部分では本体から浮き上がっているものが多かった。

刀身、鍔および脛巾

いずれも鉄製。刀身は全長69.0㎝、最大幅3.2㎝を測り、莖の端から11.5㎝の部分に鍔、脛巾が取り付き、約56㎝のところで２つに折れている。層状の剝離が見られるものの内部は比較的健全であると推定された。刀身から象嵌は発見されなかった。

鍔は長径6.4㎝、短径5.5㎝の倒卵形で厚さは約７㎜。把側の面は早くから象嵌の存在が知られていたが、損傷が激しく約⅓の部分を残すのみで、しかも鍔本体から遊離していた。しかし、このことを利用して鍔のＸ線写真を各面ごとに撮影することができたのは幸いであった＜写真－４＞＜第22図＞。その結果、象嵌は把側の面以外に、刀身側の面および側面にも発見された。把側、刀身側の文様はともに同一で、10～13本の弧文を内部に描いたハート形を６つ配し、それらと縁との空間を一重から三重の弧文で埋めている。側面の文様は判然としないが、上記の弧文から連なって円文を形づくっている可能性もあろう。なお、把側面の剝落片が保管されていたため象嵌表出を行なうのに好都合であった＜写真－５＞。

脛巾は薄い鉄板で覆われ、それにも象嵌が施されていることがＸ線写真から判明したが、文様については未解明である。

(2) 銅鋺

青銅製。最大で８㎝×３㎝を測る口縁部と底部の破片８つのほかは、粉末もしくはそれに近い状態になっていた。白緑色の腐食生成物が広がり、特に底部と見られる部分の劣化が著しかった。内側にろくろ引きと見られる沈線文が認められた。

3） 銀象嵌装直刀の保存処理

(1) 仮どめ処置

全体に表面の劣化が進行しており、特に把頭、鍔、脛巾は層状の剝離が著しく手に取るのも危険な状態であったため、まず応急的な強化処置を実施した。乾燥機中で乾燥後、非水系アクリルエマルジョン　パラロイドＮＡＤ－10の30％ナフサ溶液を減圧含浸してから自然乾燥した。その後、銀線の浮き上がった個所を保護するためマイクロバルーンと繊維素系接着剤セメダインＣを混合したペーストで固定した。

(2) 把頭および鍔の象嵌表出

Ｘ線写真によって確認できた象嵌のうち把頭と鍔の剝落片（前述）については、表面を覆っている錆を削り落して象嵌を研ぎ出す作業を行なったが、刀身に付着している部分は後日あらためて実施することとした。作業はすべて実体顕微鏡（オリンパス　ＳＺＨ－131）下で行なった。

銀線の位置をＸ線写真からほぼ精確にとらえられたので、錆に埋まっている銀線の縁に沿って、先端直径0.9㎜の球状ダイアモンドチップ（ミニターＺ421）を装着したグラインダーで錆を

削った。ただし、銀線がどれだけの深さに埋まっているかは写真から判定できなかったので、削りすぎて銀線を傷つけないように慎重に作業を進めた（実体鏡の倍率30倍）。ごく薄い錆膜を残す所でこの作業は止め、針やヘラ等で膜を剝ぎ取る一方、先端が針状のチップ（ミニターＺ431）で銀線の境界部分をなぞり、線の太さを明らかにした（実体鏡の倍率40倍）。

ところで、グラインダーの衝撃で錆膜がはじけ飛ぶことがしばしばあり、この場合に最も完全に近い状態の銀線表面が観察できた。その結果、把頭では軸に対し平行方向に、鍔破片では互いに直交して走る微細な擦り傷が認められ＜写真－６＞、これは制作当時、銀線を埋め込んでから表面を研磨した痕跡と推測される。ほかに、銀線を埋めるために彫ったと考えられる断面Ｖ字形の溝が見出された＜写真－７＞。銀線の埋まっている深さは一様ではなく、１本の線についてもかなり激しい起伏や断層が見られ、腐食による変形の複雑さが知られた。なお、剝離した銀線を用いて東京国立文化財研究所で成分を分析して戴いたところ、極めて高純度の銀であるとの結果が出た。精錬技術の高さが想像される。

作業中、切削粉等を除くためブロアーで吹き飛ばしてから無水アルコールで良く拭った。表出した銀線表面の腐食防止のためアクリル樹脂　パラロイドＢ－72の10％トルエン溶液を塗布した。

⑶　刀身の本処理

仮どめ処理の約３カ月後、刀身の２個所から錆汁が出てきたので全面にわたって錆を落し（グラインダーとエアブレイシヴ―＃３アルミナパウダー―使用）、破損部分の接合後、80℃の乾燥機中で７日間乾燥してからパラロイドＮＡＤ－10の減圧含浸と自然乾燥とを交互に３回繰り返した。

4）　銅鋺の保存処理

錆の安定化のためベンゾトリアゾール（ＢＴＡ）の３％（重量）エタノール溶液を３時間減圧含浸後、大気を導入、密封して７日間放置してから室温で自然乾燥した。次に強化のためパラロイドＢ－72の20％キシレン溶液に３％（重量）のＢＴＡを加えた溶液を１昼夜減圧含浸後自然乾燥した。表面の一部にＢＴＡの結晶の付着が見られたのでキシレンを用いて除去した。各破片の接合は行なっていない。

5）　銅鋺中の鉛の産地について

鉛を含有する考古遺物について、鉛同位体比の測定結果から原料の鉛鉱山が解明されつつある[(3)]ことは既に広く知られているが、今回、稲荷塚出土銅鋺について東京国立文化財研究所において鉛同位体比を測定して戴くことができた。供試したのはポリエチレン袋内に残っていた未処理の錆の粉末であった。測定の結果、試料の鉛同位体比は朝鮮半島慶尚北道の蓮花鉱山産出の鉛鉱石の同位体比の範囲内に入ることが判明した。このことから銅鋺の材料中に含まれている鉛は三国時代新羅産のものと見られる。ただし、銅鋺の材料全体、あるいは銅鋺そのものが新羅産であるかどうかは今後の検討に待つことになろう。

6）　おわりに

今回の処理においては、遺物に損傷を与える危険があったため直刀に付着している鍔や脛巾

の象　嵌出は行えなかった。今後機会を得て、充分な安全対策を施したうえで全面的な表出作業を試みたい。銅鋺の微量の錆から原料の産地を朝鮮半島に求めることができたことは、地球化学や分析化学の応用が考古遺物の研究に有効であることを示している。県内出土の遺物に対してこの種の分析が積極的に取り入れられることを望む。末尾ながら、今回処理の機会を与えて下さった県埋蔵文化財センターの末木　健氏に心より感謝いたします。

註

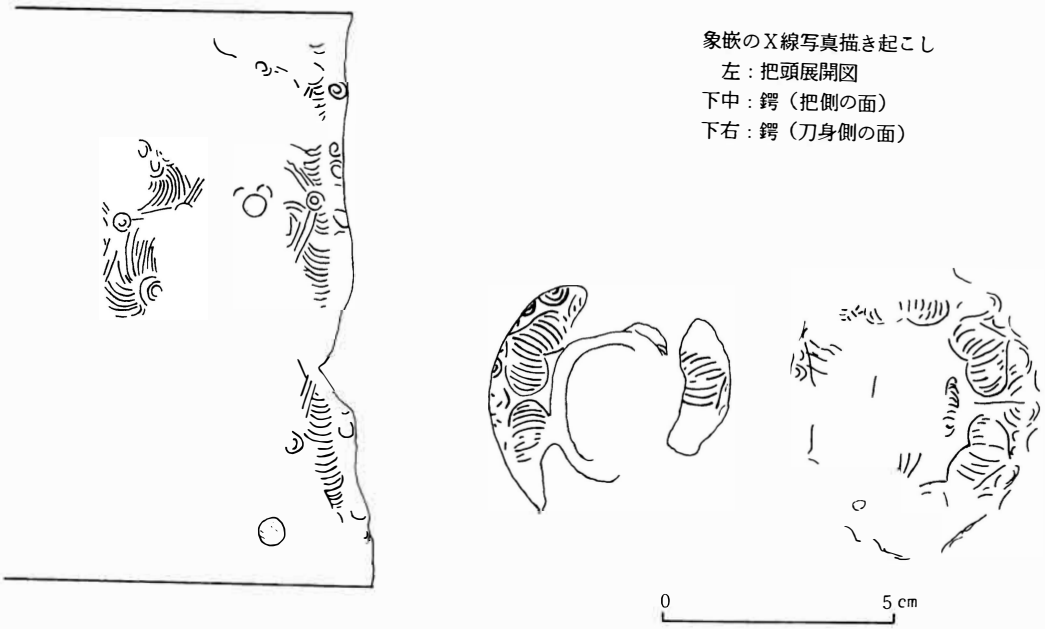
(1)　X線発生装置はフィリップス社製（東京国立文化財研究所）と日立メディコ社製（山梨文化財研究所）を用いた。<写真－２>は前者、他は後者による。

(2)　象　嵌文様および表出については下記の文献が有益だった。

- 青木　繁夫「筑波山古墳出土鉄製品の錆の安定化処理に関する研究」『保存科学』№26 P．53　1987年　東京国立文化財研究所
- 服部　哲則「成田市公津原瓢塚40号出土象　嵌大刀の保存処理－とくに象　嵌出について－」『研究連絡誌』第20号　1987年９月　千葉県文化財センター

(3)　鉛同位体比法に関するおもな文献を以下に挙げる。参照されたい。

- 馬淵　久夫「古鏡の原料をさぐる－鉛同位体比法」『考古学のための化学10章』P.157　馬淵　久夫・富永　健編　東京大学出版会　1981年
- 馬淵　久夫「青銅　剣の流れを追って－鉛同位体比法の展開」『続 考古学のための化学10章』P.129　馬淵　久夫・富永　健編　東京大学出版会　1986年
- 馬淵　久夫・平尾　良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比－青銅器との関連を中心に－」『考古学雑誌』第73巻第２号　1987年12月



第22図　象嵌のX線写真描き起こし図

表１　挿図掲載遺物出土位置対照表

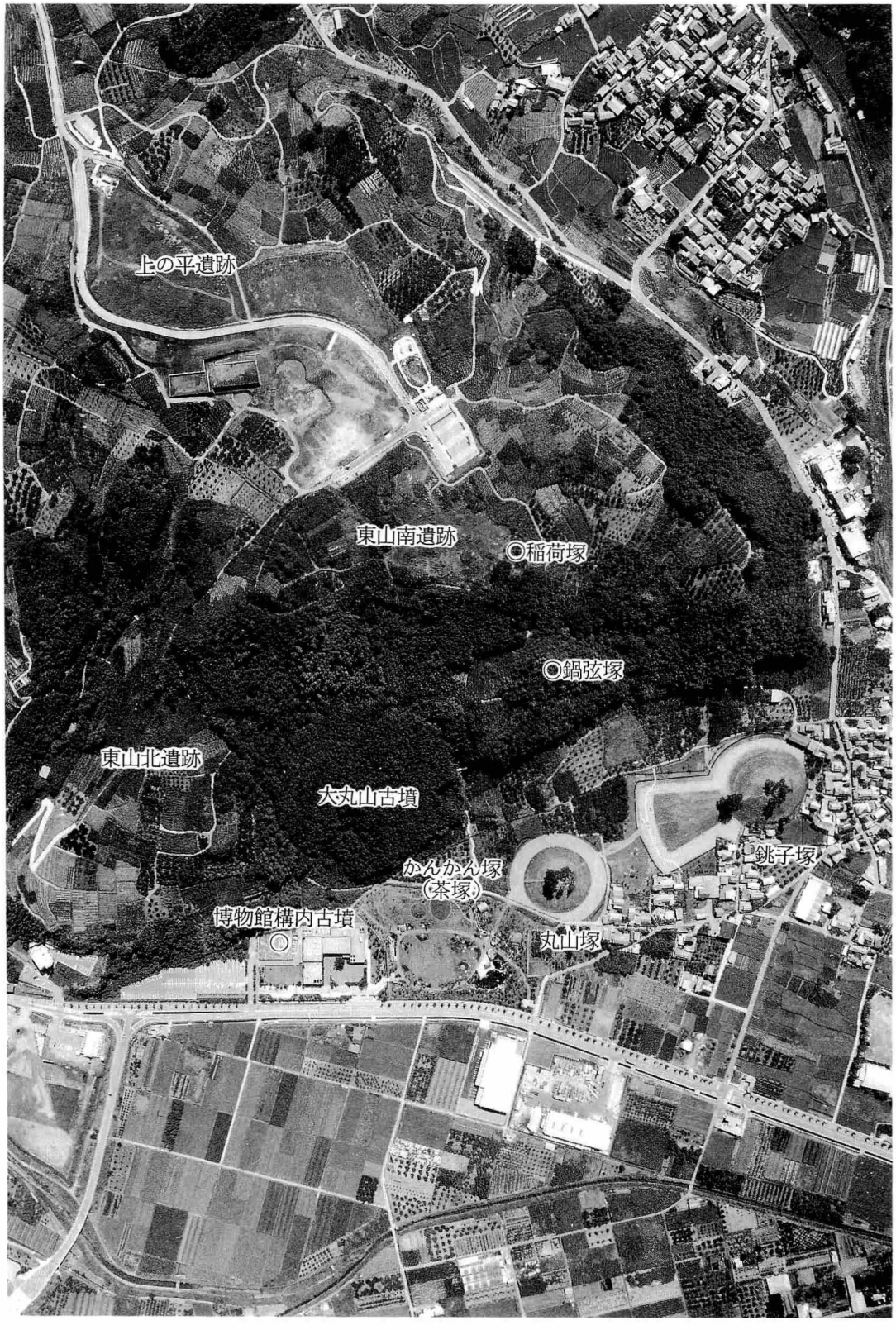
挿図No.	出土No.	遺物名	挿図No.	出土No.	遺物名	挿図No.	出土No.	遺物名	挿図No.	出土No.	遺物名
12－ 1	F－18	直　刀	16－ 1	F－10	鉄　鏃	17－ 4	F-113	小　札	18－37	F-105	小　札
12－ 2	〃	直刀鍔	16－ 2	F－20	鉄　鏃	17－ 5	F-113	小　札	18－38	F-112	小　札
12－ 3	F－49	円頭把頭	16－ 3	F-115	鉄　鏃	17－ 6	F-116	小　札	18－39	F－28	小　札
12－ 4	F－20	足金物	16－ 4	F－ 4	鉄　鏃	17－ 7	F-113	小　札	18－40	F－37	小　札
13－ 1	石室入口	刀　子	16－ 5	F-134	鉄　鏃	17－ 8	F-132	小　札	18－41	F－29	小　札
13－ 2	F－98	刀　子	16－ 6	F－ 5	鉄　鏃	17－ 9	F-123	小　札	18－42	F－69	小　札
13－ 3	F－58	刀　子	16－ 7	F－62	鉄　鏃	17－10	F-116	小　札	18－43	F-105	小　札
13－ 4	F－40	刀　子	16－ 8	F－63	鉄　鏃	17－11	F-111	小　札	19－ 1	D1～3	銅　鋺
13－ 5	F－98	刀　子	16－ 9	F－80	鉄　鏃	17－12	F－ 7	小　札	19－ 2	T－ 4	切子玉
13－ 6	F－71	刀　子	16－10	F－64	鉄　鏃	17－13	F－ 8	小　札	19－ 3	T－ 1	切子玉
13－ 7	F－57	刀　子	16－11	F－83	鉄　鏃	17－14	F－21	小　札	19－ 4	T－ 2	切子玉
13－ 8	F－ 1	刀　子	16－12	F－53	鉄　鏃	17－15	F－32	小　札	19－ 5	T－13	切子玉
13－ 9	F－72	刀　子	16－13	F－ 3	鉄　鏃	17－16	F-126	小　札	19－ 6	T－ 5	土製錬玉
13－10	F－47	刀　子	16－14	F－55	鉄　鏃	17－17	F－23	小　札	19－ 7	T－ 6	土製錬玉
13－11	F－48	刀　子	16－15	F－71	鉄　鏃	18－18	F-121	小　札	19－ 8	T－ 7	土製錬玉
13－12	F－46	刀　子	16－16	F－79	鉄　鏃	18－19	F－ 4	小　札	19－ 9	T－ 8	土製錬玉
13－13	F-102	雲　珠	16－17	F－56	鉄　鏃	18－20	F－23	小　札	19－10	T－ 9	土製錬玉
14－14	F－16	鐙	16－18	F－87	鉄　鏃	18－21	F-112	小　札	19－11	T－10	土製錬玉
14－15	F-106	鐙	16－19	F－79	鉄　鏃	18－22	F-109	小　札	19－12	T－11	土製錬玉
15－16	F-135	轡	16－20	F-148	鉄　鏃	18－23	F-131	小　札	19－13	T－12	土製錬玉
15－16	F-138	轡	16－21	F－79	鉄　鏃	18－24	F-124	小　札	19－14	T－ 2	土製錬玉
15－17	F-103	鉸　具	16－22	F－60	鉄　鏃	18－25	F-119	小　札	19－15	T－ 1	土製錬玉
15－18	F-136	鉸　具	16－23	F－85	鉄　鏃	18－26	F－23	小　札	19－16	T－14	土製錬玉
15－19	F－31	鉸　具	16－24	F－52	鉄　鏃	18－27	F-112	小　札	19－17	G－ 6	金　環
15－20	F－30	鉸　具	16－25	F－82	鉄　鏃	18－28	F－38	小　札	19－18	G－ 1	金　環
15－21	F－42	鉸　具	16－26	F－12	鉄　鏃	18－29	F－ 4	小　札	19－19	G－ 3	金　環
15－22	F－42	鉸　具	16－27	F－66	鉄　鏃	18－30	F-113	小　札	19－20	G－11	金　環
15－23	F－27	鉸　具	16－28	F－13	鉄　鏃	18－31	F－ 9	小　札	19－21	G－ 9	金　環
15－24	石室内		16－29	F-130	鉄　鏃	18－31	F－ 9	小　札	19－22	G－ 8	金　環
15－25	F－24		16－30	F－75	鉄　鏃	18－32	F-125	小　札	19－23	G－ 2	金　環
15－26	F－43	飾り金具	16－31	F-118	鉄　鏃	18－33	F－23	小　札	19－24	G－10	金　環
15－27	F-109	飾り金具	17－ 1	F-137	甲冑一部	18－34	F－38	小　札	19－25	G－ 7	金　環
15－28	石室内	飾り金具	17－ 2	F-132	甲冑一部	18－35	F-129	小　札	19－26	G－ 5	金　環
15－29	F－41	飾り金具	17－ 3	F-110	甲冑一部	18－36	馬具一括	小　札	19－27	G－ 4	金　環

表２　土師器・須恵器計測表（１号墳）

No.	出土位置	器形	法量（口径・器高・底径）	備　考	No.	出土位置	器形	法量（口径・器高・底径）	備　考
7－1	石室入口	坏	13×3.3×？		7－2	石室入口	坏	12.8×？×？	内外面赤色
7－3	前庭部	坏	12.2×？×？		7－4	墳　丘	坏	11.8×？×？	内外面赤色
7－5	石室入口	坏	13×？×？	内外面黒色	7－6	前庭部	坏	9.6×？×？	
7－7	前庭部	坏	12.8×？×？		7－8	墳　丘	高坏	？×？×11	
7－9	前庭部	高坏	？×？×10.4		7－10	P－12	小型壺	9.7×10.1×5.4	
7－11	墳　丘	壺底部	？×？×8.8		7－12	墳　丘	坏	12.6×？×？	
7－13	閉　塞	坏	10.2×？×？		7－14	閉　塞	坏	11×？×？	
7－15	閉　塞	坏	9×？×？		7－16	西側墳丘	坏	13×？×？	
7－17	西側墳丘	坏	11×？×？		7－18	石室内	坏	11×？×？	
7－19	石室内	坏	11.6×？×？		8－20	P－4	蓋	11.3×4.5×4.2	
8－21	4トレンチ	蓋	12.4×？×？		8－22	前　庭	蓋	14×？×？	
8－23	閉　塞	蓋	11×？×？		8－24	西側墳丘	蓋	10.6×？×？	
8－25	前庭部	蓋	11×？×？		8－26	墳　丘	蓋	10×？×？	
8－27	石　室	甕			8－28	石　室	甕	？×？×5.4	
8－29	石　室	平瓶	8×17.5×7.2		8－30	P-5・9	平瓶	4.4×11.2×5.2	
8－31	前　庭	底部	？×？×4.8		8－32	P－1	底部	？×？×6	「×」の刻書
8－33	石　室	底部	？×？×5		8－34	石　室	底部	？×？×6.6	
9－35	前　庭	提瓶			9－36	P－9	提瓶		
9－37	4トレンチ	甕口縁	37×？×？		10－38	墳　丘	甕	23.6×？×？	
10－39	墳　丘	甕	23.6×？×？		10－40	閉　塞	甕	25.4×？×？	
10－41	石　室	甕	19.6×？×？						

図　　版

図版 1 航空写真



図版 2 石室・墳丘・遺物出土状態

1号墳墳丘調査前

1号墳石室全景

1号墳石室西側壁

1号墳閉塞石

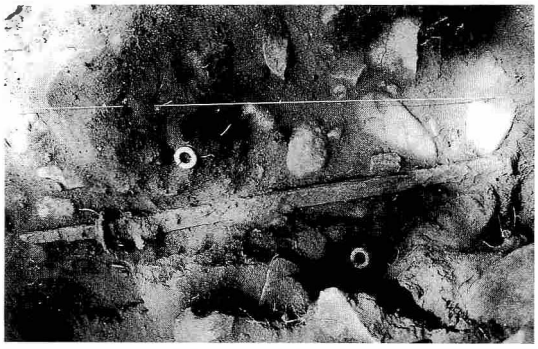
1号墳奥壁

1号墳墳丘列石

1号墳馬具出土状態

1号墳馬具出土状態

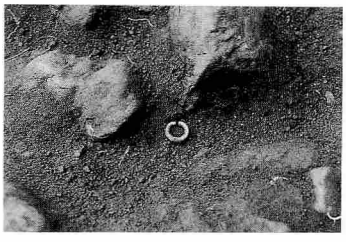
図版 3 石室・墳丘・遺物出土状態



1号墳直刀出土状態

3号墳調査状況

1号墳円頭把頭
出土状態



1号墳金環出土状態

1号墳平安時代土師器
出土状態

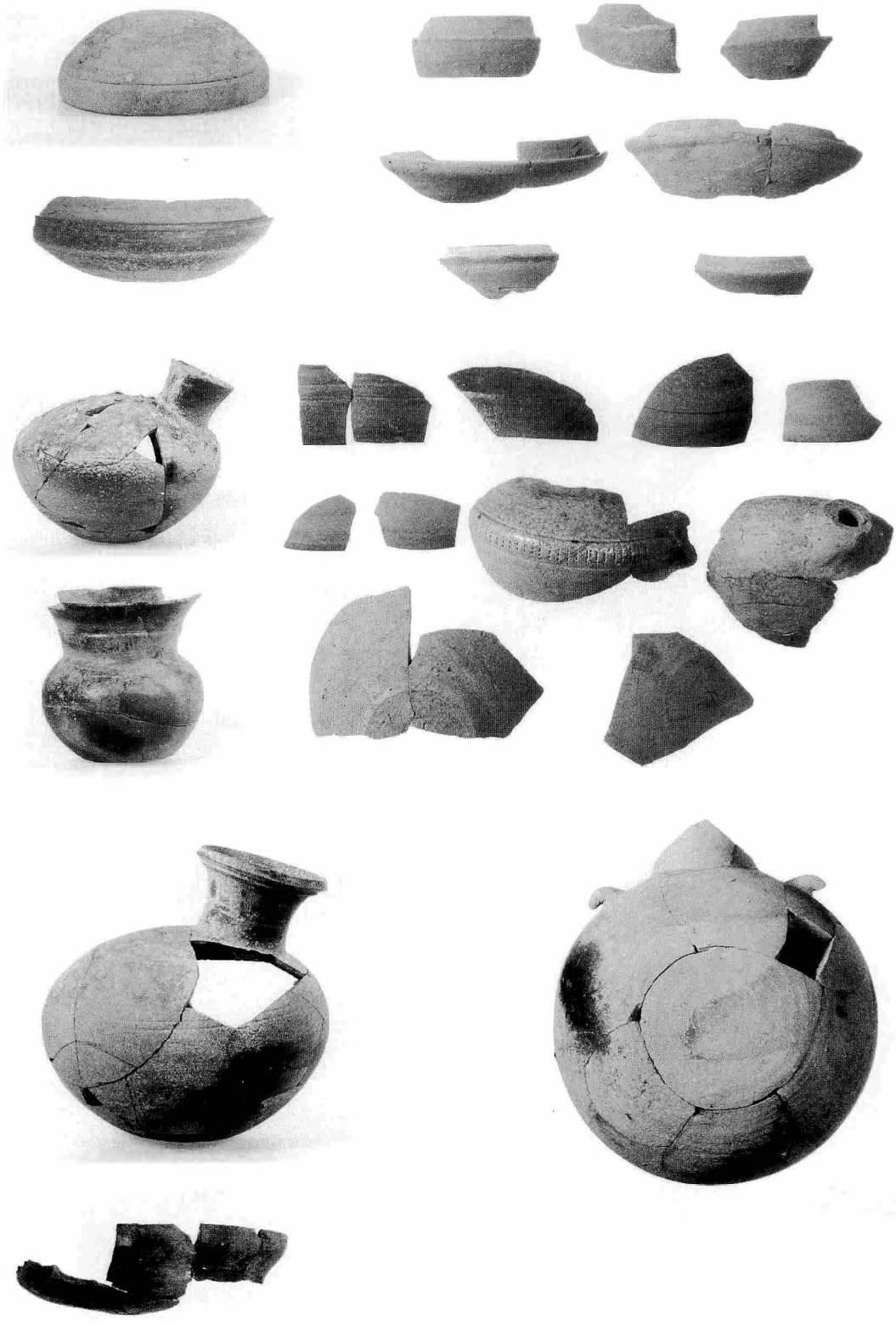
1号墳石室全景

1号墳石室学習会

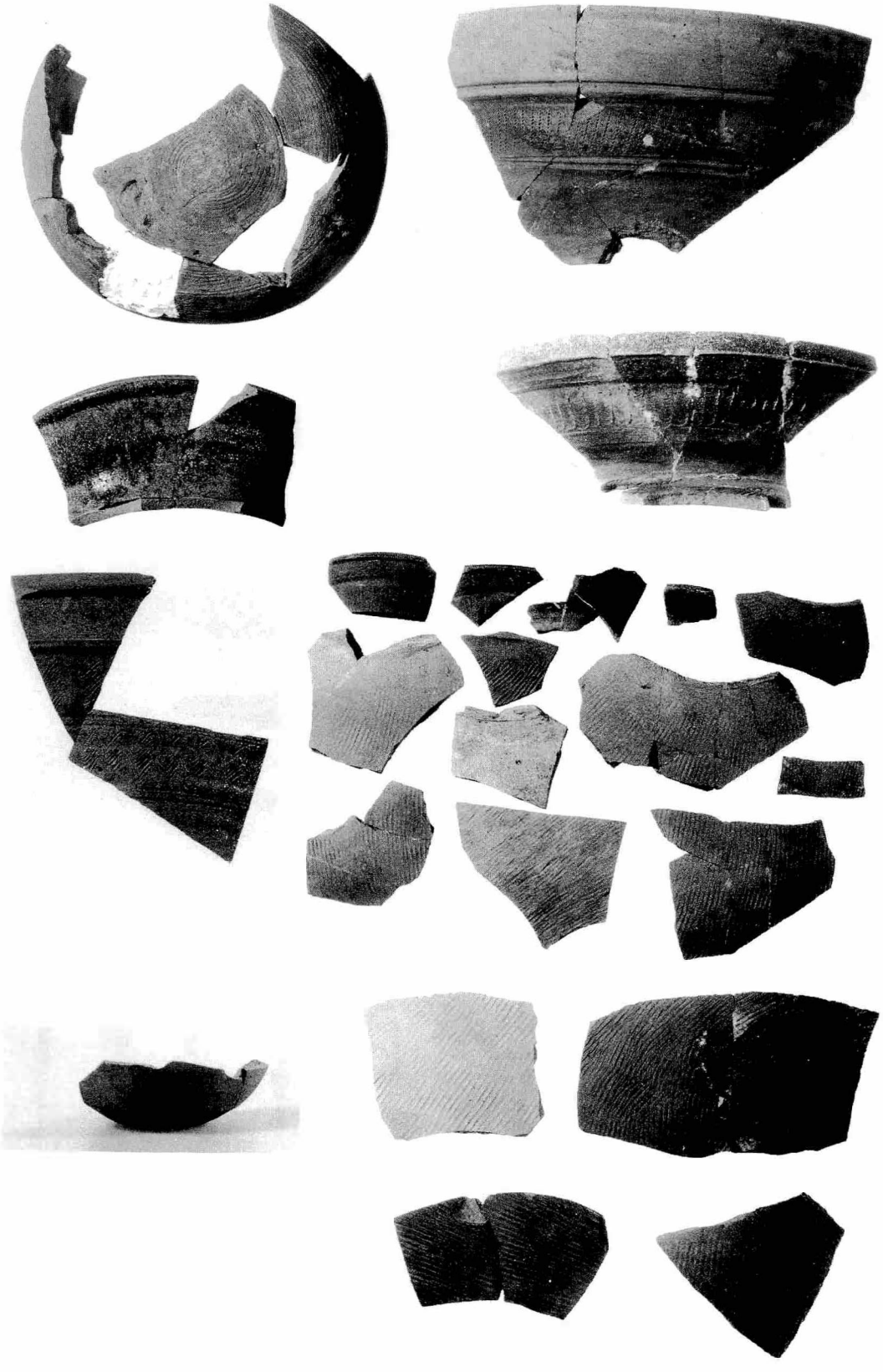
1号墳雲珠出土状態

1号墳銅鋺出土状態

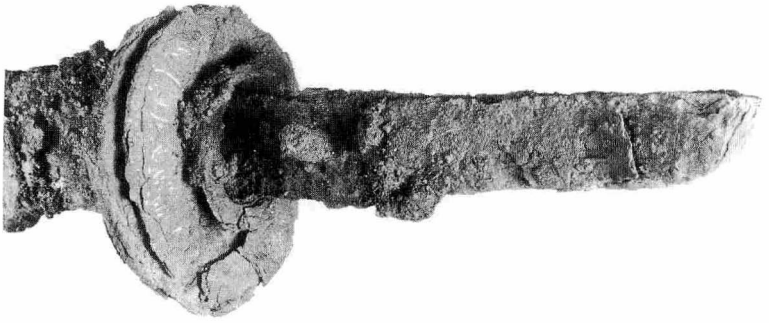
図版 4 一号墳出土須恵器・土師器 1

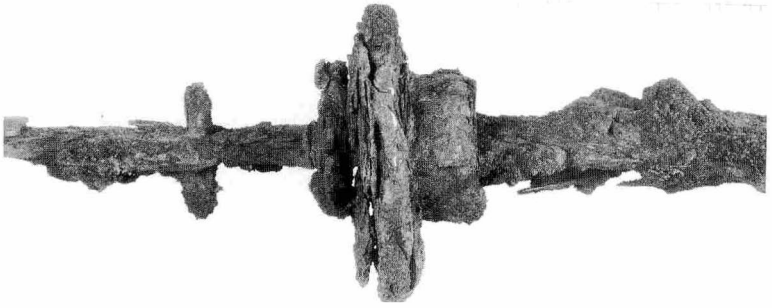


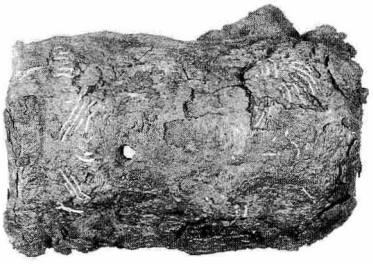
図版 5 一号墳出土須恵器 2

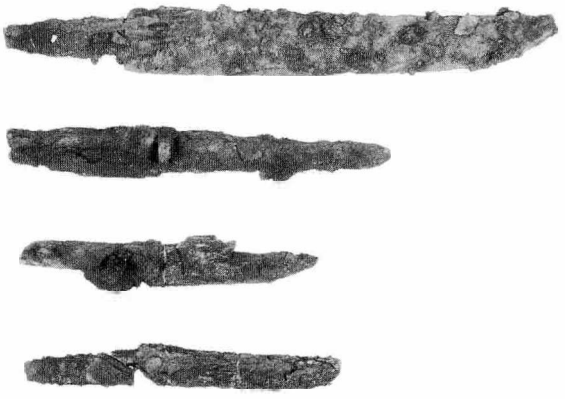


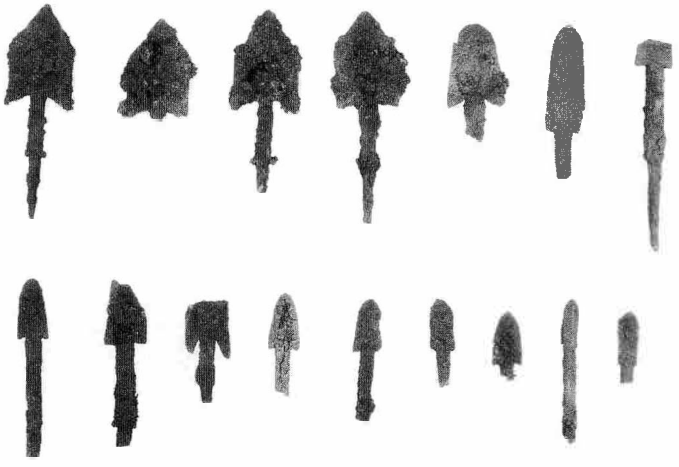
図版 6 一号墳出土象嵌装飾円頭大刀・刀子・鉄鏃



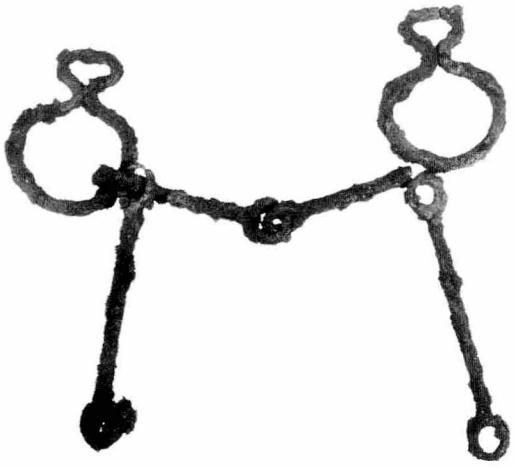


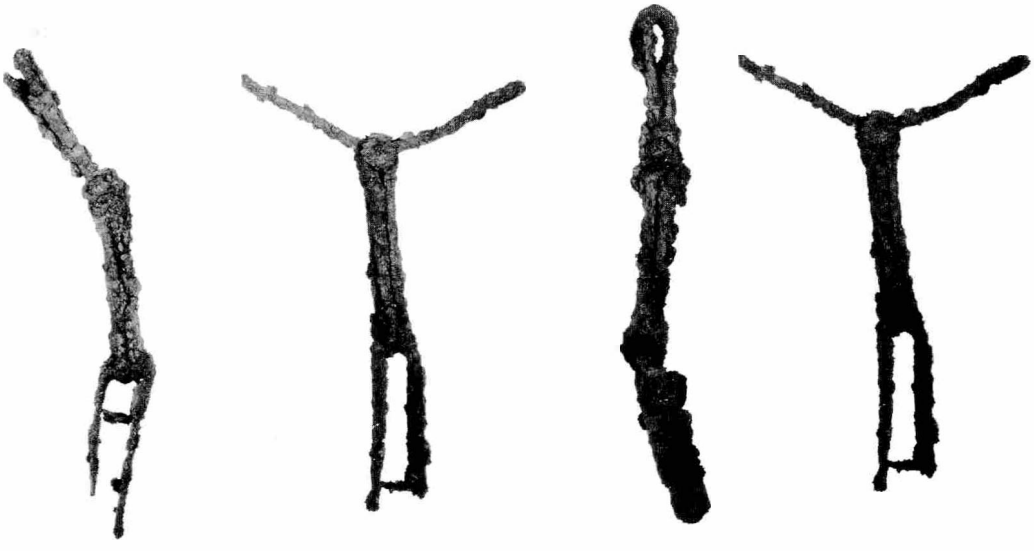




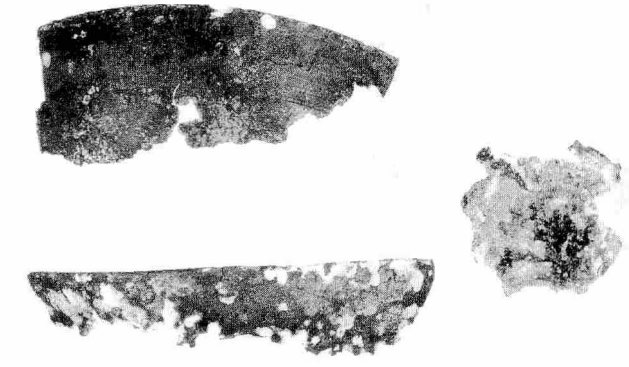


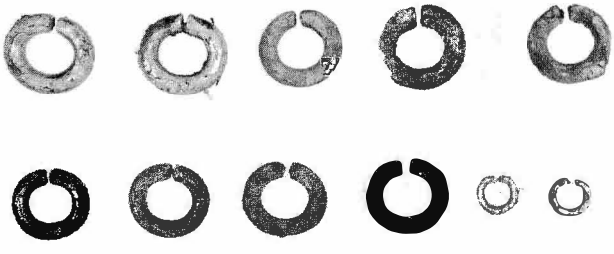
図版 7 一号墳出土馬具

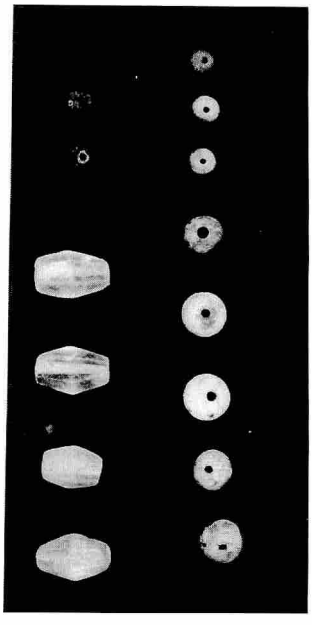




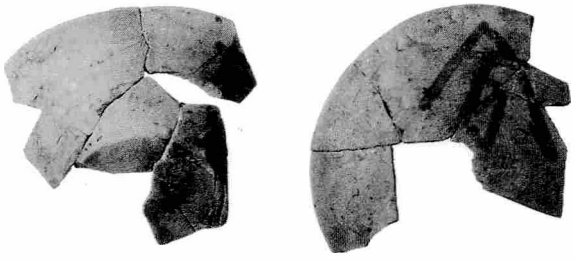
図版 8 一号墳出土甲冑小札・銅鋺・玉



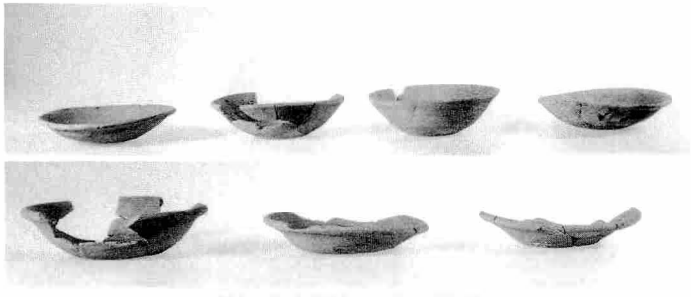




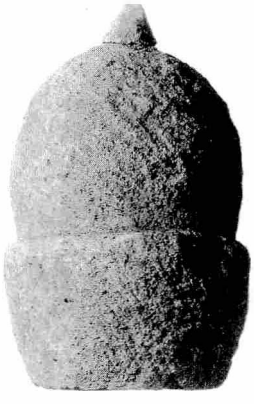
1号墳出土土師器



1号墳出土平安時代墨書土器

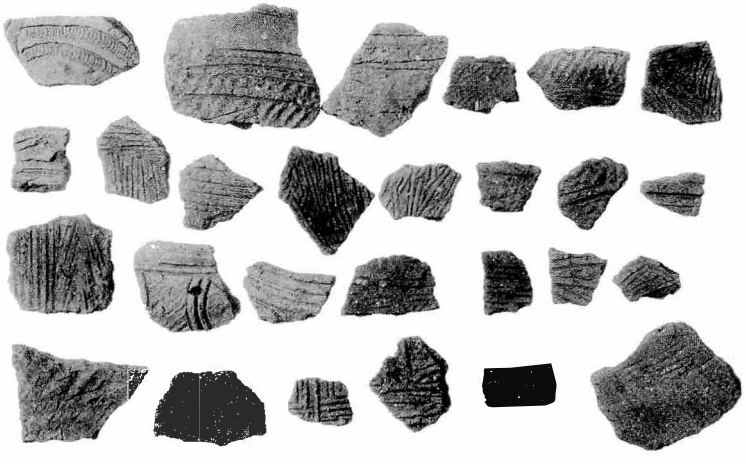


1号墳出土平安時代土師器



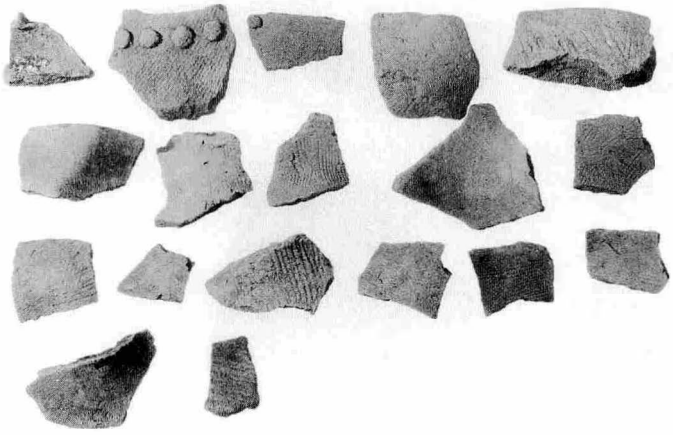
3号墳出土空風輪

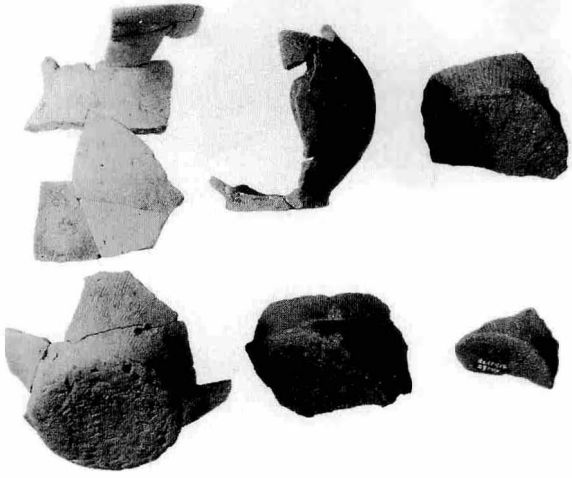
2号墳出土土製品

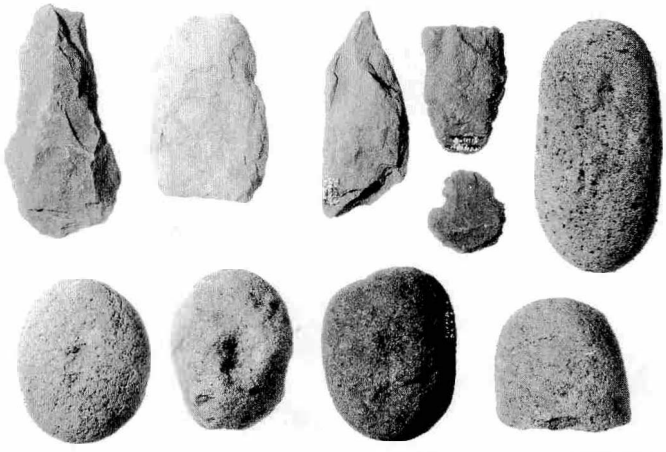


1、2号墳出土縄文時代土器

図版 10 二号墳出土弥生土器・縄文時代石器





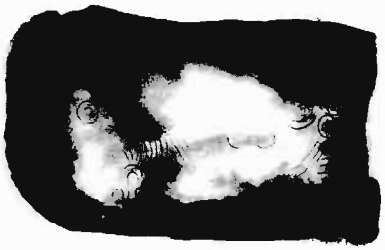


<写真－1>把頭（佩裏）

（処理前）

0　1　2cm　（処理後）

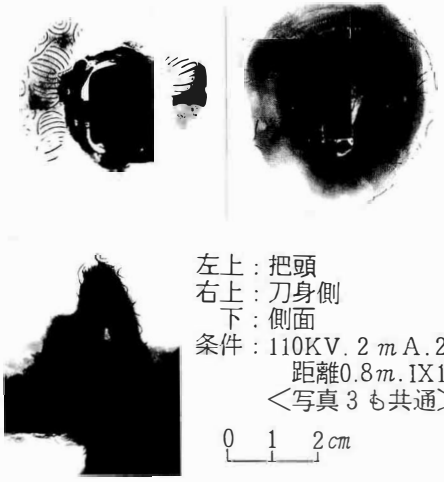
<写真－2>把頭のX線写真



0　1　2cm

条件：130KV. 5 mA. 5分. 距離1.1m IX 100

<写真－4>鍔のX線写真



左上：把頭
右上：刀身側
下：側面
条件：110KV. 2 mA. 2分
距離0.8m. IX100
<写真3も共通>

0　1　2cm

<写真－3>把頭のX線展開写真

0　1　2cm

<写真－5>鍔破片

（処理前）

（処理後）

0　1　2cm

<写真－6>銀線拡大図

<写真－7>V字形の溝

昭和63年３月25日　印刷
昭和63年３月31日　発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第38集

稲荷塚古墳
INARIDUKA KOFUN

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
TEL　0552－66－3881
発　行　山梨県教育委員会
印　刷　株式会社　峡南堂印刷